

先輩教師からのメッセージⅢ

— これからの教育を担うみなさんへ —



先輩教師からのメッセージⅢ
これからの教育を担うみなさんへ
令和4年3月

栃木県総合教育センター



本冊子は下の Web サイトでも御覧いただけます。

https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/senpai_message/menu.htm



先輩教師からのメッセージⅢ

ーこれからの教育を担うみなさんへー

まえがき

社会の在り方が劇的に変わるSociety5.0時代の到来や、新型コロナウイルス感染症の感染拡大など、予測困難な時代の中で「令和の日本型学校教育」の実現を目指し、時代の変化に対応できる資質・能力を身に付けた教職員の育成や、教職員が生き生きと活躍できる環境の整備が求められています。また、昨今の状況においては、団塊の世代の退職に伴い、若手教職員の増加や教職員の年齢構成の不均衡といった課題が生じているところでもあります。

このような中であって、各学校においては、若手教職員が日々の実践から学びながら成長し、教育活動の中心となり活躍することが期待されています。そこで、当センターでは、現在活躍されているミドルリーダー世代の教職員に、「自身の成長につながった経験」や「ミドルリーダーとして大切にしていること」などについて執筆を依頼し、小冊子にまとめました。お寄せいただいた玉稿には様々なドラマがあり、日々の業務の中で見過ごしがちな学校教育の意義や、子どもたちの成長を支える教職の魅力に、改めて気付くことができます。若手教職員にとつて成長の指針となるものであると同時に、全ての教職員に自らの職責とやりがいとを再確認させてくれるものであり、教育活動に活力を与えてくれるものと確信しております。

学校をはじめ関係機関におかれましては、本冊子の作成の意図を御理解いただき、教職員の資質・能力の向上、学校の教育力向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

令和四年三月

栃木県総合教育センター所長 大島 政 春

目次

まえがき

確かな学びを目指して

子どもと共に	宇都宮市立泉が丘小学校教諭	齋藤 亜沙美	8
多くの人に支えられて	下野市立古山小学校教諭	高橋 真江	10
挑戦すること、真似ることから得られるもの	那須町立高久小学校教諭	小須賀 沙耶花	12
「学ぶ楽しさ」を大切に	日光市立大沢中学校教諭	旭山 晴美	14
音楽の授業を通して得たもの	さくらし立氏家中学校教諭	西脇 紀子	16
授業を創る	那須塩原市立黒磯中学校教諭	石井 宗宏	18
螺旋に連なる知の高みを目指して	県立宇都宮女子高等学校教諭	黒川 治彦	20
全ての基本は授業から	県立真岡北陵高等学校教諭	柳 路子	22
〈コラム〉「授業」について考える			24
個性や社会性の伸長を目指して			
大切な子どもたちのために	認定こども園愛泉幼稚園保育教諭	石島 あさみ	26
分岐点	認定こども園黒羽幼稚園主幹保育教諭	田口 裕美	28
学業指導の充実を目指して	茂木町立茂木小学校教諭	箕輪 尚子	30

これからも大切にしていきたいこと	足利市立富田小学校教諭	内田祥弘	32
私が生徒指導で大切にしていること	鹿沼市立栗野中学校教諭	伊奈川正通	34
生徒指導と人とのつながり	小山市立桑中学校教諭	相羽克隼	36
私の三つの心掛け	県立小山西高等学校教諭	栗原英男	38
心に留めている二つのこと	県立小山西高等学校教諭	野口章代	40
子どもたちと保護者から学んだこと	県立南那須特別支援学校教諭	小林奈津美	42
〈コラム〉よりよい児童・生徒指導のために			44

心と体の成長を目指して

置かれた場所で咲けるように	宇都宮市立岡本北小学校栄養教諭	澁谷三千代	46
養護教諭として学んだこと	小山市立大谷北小学校養護教諭	小堤正子	48
初心勿忘	宇都宮市立一条中学校養護教諭	佐藤真由美	50
子どもたちの健康づくりの一助となるように	壬生町立壬生中学校栄養教諭	吉葉裕子	52
養護教諭として	小山市立小山城南中学校養護教諭	橋本牧子	54
不器用だからこそ	県立豊学校養護教諭	岩崎美絵	56
〈コラム〉健やかな体を保つ			58

充実した集団活動を目指して

いいことづくし学級会	鹿沼市立菊沢東小学校教諭	大久保	幸江	60
六年生を成長させる縦割り班活動	足利市立東山小学校教諭	永島	厚洋	62
特別活動で生徒も成長、私も成長	宇都宮市立豊郷中学校教諭	松本	清美	64
部活動指導から得られるもの	市貝町立市貝中学校教諭	涌井	俊裕	66
先輩教師等から学ぶ部活動指導	大田原市立野崎中学校教諭	高橋	尚孝	68
自分を生きる	県立宇都宮高等学校教諭	田村	絵美	70
ものづくりの楽しさを伝えるために	県立宇都宮工業高等学校実習教諭	宮田	真寿	72
〈コラム〉 集団活動で成長する				74

自立と社会参加を目指して

特別支援教育と私	野木町立新橋小学校教諭	吉田	理徳子	76
「応答する環境」を目指して	那珂川町立小川小学校教諭	山本	敏江	78
子どもたちと共にあること	那須塩原市立黒磯小学校教諭	齋藤	由紀恵	80
副園長の教え	宇都宮市立晃陽中学校教諭	松本	有紀	82
出会ってきた言葉、大事にしていること	県立聾学校教諭	小川	友紀子	84
子どもの笑顔を連携の輪の中心に	県立国分寺特別支援学校教諭	大西	真純	86
教師の楽しみとは	県立足利中央特別支援学校教諭	小林	文子	88
〈コラム〉 自信を育む特別支援教育				90

協働を目指して

共に学び合うこと	みふみ認定こども園副園長	石戸奈緒美	92
憧れの存在を目指して	認定こども園かしわ幼稚園保育教諭	大久保美文	94
辛い経験を乗り越えて	認定こども園あかみ幼稚園保育教諭	久保智美	96
人とのつながりを大切に	野木町立南赤塚小学校事務長	鈴木智美	98
ささやかだけれど大切にしたいこと	さくら市立氏家小学校教諭	吉永恵	100
同僚性で校務分掌をよりよいものに	上三川町立明治中学校教諭	宇都木香緒里	102
学級担任が受け取るもの	茂木町立茂木中学校教諭	堀口香緒里	104
仲間と学校事務職員の未来を描こう	那須烏山市立烏山中学校事務長	大森健史	106
経験は宝物	佐野市立常盤中学校教諭	前田和代	108
不器用だと思えば	県立上三川高等学校教諭	芝野徹	110
気付き、輝く	県立壬生高等学校教諭	石川友紀	112
やればできる！	県立さくら清修高等学校教諭	久保田由佳	114
進路指導を通して	県立那須特別支援学校教諭	川俣卓也	116
〈コラム〉同僚性を高める			118

編集後記



確かな学びを目指して

子どもと共に

日々変化する子どもたち、その子どもたちの可能性を拓く創造的な職業である教職について二十一年が過ぎました。何年経験を重ねても課題が必ずあり、その課題を解決する…の繰り返しで、今も私は子どもたちと共に日々学び続けています。これまでの自分の経験を振り返り、学習指導について教師として私が大切に行っていることを紹介したいと思います。

一つ目は、教材研究を楽しむ、授業を楽しむということです。子どもから「今日の授業、楽しかった」と言われるときは、私自身も授業を楽しんでいるときが多いような気がします。問題を見いだし、解決に向けて試行錯誤しながら悩み、解決にたどり着いたとき、そして新しい問題を見付けたとき…子どもと一緒に一時間の授業をわくわくしながら取り組んでいます。もちろん、授業を楽しむためには深い教材研究が必要です。事前の教材研究で私が意識をしているのは、子どもの目線でその授業を考えるということです。子どもの立場で教材を見て思考し、一人一人の子どもの姿をイメージしながら、子どもたちが教材をどのように理解、解釈するかを予想していきます。ところが、実際に授業を進めると、子どもたちの気付きは素晴らしく、事前に私が想像していたものをはるかに越えた発想をしたり、意見を発言したりします。「やっぱり子どもってすごい」「授業っておもしろい」と改めて感じます。

二つ目は、子どもと共に学び、共に授業をつくるということです。教師の思い通りにレールを引いてしまうのではなく、子どもたちが学ぶことを好きになるような授業をしたい、自分で自分の学びをつくっていけるような力を育てたいと思っています。そのためにも特

に、授業中の子どもの反応、つぶやき、意図しないような発言を私は大切にしています。教師になったばかりの頃は、指導案どおりに進まないと焦ってしまい、子どもの意見を取り上げず進めてしまうこともありました。しかし、ある日の算数の授業で、意図していなかった子どもの発言をきっかけに、学級全体が問題解決に向けたエネルギーで満ち、子どもが進んで活動する姿が見られました。一人の発言がクラス全員に深い学びをもたらしてくれたのです。教師だけではつくれない子どもと共につくる授業の醍醐味を知りました。子どもの発言が生まれた背景を探ったり、子どもに試行錯誤させたりすることが深い学びにつながるのではないかと思います。そして、子どもが進んで話したくなる、聞きたくなるという状況を作り、共に学び合うことで個の学びが更に深まり、「主体的・対話的で深い学び」になると考えています。それを目指して、私は参加する子ども全員でつくり上げる授業を実践しています。もちろん、子ども主体の授業と言っても子ども任せの授業ではなく、目標の達成のため、計画して板書したり発問したりするなど、教師の指導の工夫が必要です。また、授業中の子どもの表情、様子、つぶやきなど小さな反応を見逃さず、子どもの新たな気付きをクラスに広げ、成長につなげることができる感性を磨きたいと思います。子ども一人一人個性があります。個に応じた学びを引き出し、一人一人の力を高めることができるよう支援したいと思っています。

これまでを振り返ると様々な人に出会い、多くのことを教えていただきました。同じ学校で勤務した先生方、研修で共に学んだ先生方、子どもたち。人との出会いによって私自身成長できたと感じます。出会った全ての先生方、そして子どもたちに感謝しています。

宇都宮市立泉が丘小学校

齋藤 亜沙美

多くの人に支えられて

現在、学力向上推進リーダーとして、教師の授業力向上を通して児童の学力向上を図る目的で市内四校を回り、各校の支援に当たっています。しかし、私の教育実習や大学時代を振り返ってみると、人前に立ったり、ピアノを前にしたりしただけで緊張が止まらないなど、一言で言うならば教師には向いていない自分の姿がありました。今のような自分の姿は全く想像すらできず、自分が教師になってやっていたとは思えませんでした。少し回り道をして教師になった私ですが、これまで大事にしてきたことが、これからの若い先生方へ何かしらのメッセージとなれば幸いです。

私は、大学卒業後民間企業へ就職し、社会人としての生活をスタートさせました。会社では、信用・信頼を得ながら誠実に働くこと、丁寧な接遇、社業発展のため業務に対し責任を果たすことの大切さを学びました。また、お客様からいただくお金が、自分の（責任を果たし、成果を出した分の対価としての）給料となることを実感しながら、社会人としての心構えを身に付けていきました。今振り返ると、お客様をはじめ、仕事を通して接する様々な職種・年代の方々との関わりから、広い視野で物事を見聞きし、考え、行動することなど、仕事をする上で大切なことをたくさん学ぶことができたように思います。

教師になってからも、多くの先生方に育てていただきました。教師としての豊かな表情、子どもとの関わり方、授業への目の向け方や留意すべきこと、子どもの心をつかむ話術など、どの教科でも通じる大事なことを先輩教師から学びました。当然、それを知ったからといって、すぐに実践できるものではありませんでしたが、当時、若さだけは役に立ち、

できそうなものから挑戦しました。そこには共に学ぶ仲間もおり、先輩教師に教えを請うたり、技を真似たりしました。未熟ながらも定期的に研究授業を行い、多くの先輩教師から御指導をいただくことを通して、指導案や教材作成、板書計画、子どもの反応を見取りながらの授業展開など、実践を基にしたよりよい学びを得ることができました。そこから、日頃の教材研究の大切さを実感するようになりました。さらに、苦勞した時こそ、その経験が後々の糧になるのだと思います。また、先輩教師からは、常に子どものよりよい成長を願うぶれない指導があることにも気付かせていただきました。私は、授業では子どもの知的好奇心を捉え、伸ばしてやるのが大切だと考えています。教師も学びを楽しむ心の余裕がないと、深いところまで思いが至りません。授業が上手な教師は、学級経営も上手で、子どもたちのよりよい変容をもたらしています。授業も学級経営もつながっています。子どもたちの心を受け止めながら、一人一人をよく見て、よりよい成長を促す先輩教師から、仕事だけでなく人として尊敬する面をいくつも学ばせていただきました。

何事も、経験したことは自分を育てる糧となります。子どもが経験を通して実感したことは、より深い理解につながることは周知の事実ですが、学習指導についても然りです。まずは、様々なことに臆せずチャレンジし、子どもの学習状況をしっかりと見取りながら、よりよい指導となるよう改善して次に生かせばいいのです。小学校の学習指導は、子どもの学びに根を張る責任重大な仕事です。まだまだ力足らずの自分ですが、無限の可能性を秘めた子どもたちのよりよい成長を目指し、学校、保護者、地域の方々と力を合わせながら責任を果たせるよう、今後も日々精進していきたいと思っています。

下野市立古山小学校

高橋 真江

挑戦すること、真似ることから得られるもの

ずっと年下だと思っていた自分が、気が付けば先輩となり、教職十七年目を迎え、私が初任のころに児童だったような若い先生方と仕事をさせていただくようになりました。私自身は初任の頃、忙しい教育現場の現実と自分の不甲斐なさに落ち込む日々でした。運動も音楽も、専門性がない私は、何の指導にも自信がもてませんでした。だから、もしかしたらそんな思いをされている方もいるのではないかと、とも思ってこの文章を書きます。

私が前向きになれたのは、ある研修で、面白い授業の実践を紹介してくれたベテランの先生から「私は自信がない。けれど、何か使えるものはないかな、と常に考えて物事を見て、やってみることは得意です」というような話をお聞きしたことがきっかけかもしれません。得意、不得意、向き、不向き：そんなことをいつも考えてしまい、手を出してこなかった自分がどれだけの時間を無駄にしてきたかと痛感しました。「これ使えそう」「やってみよう」と挑戦すること、真似することが、自分の糧になるのかもしれない、失敗してもいいからやってみようと強く思ったのです。そして、今の私は、「何か使えるものはないかな」と、授業や学級経営で使えるネタを探しています。見たもの聞いたもの、他の人の授業、講話、なんでもいいのです。少しでも新しいものをやってみたい、面白いものを試してみたい、と思うようになりました。うちの子たちは苦手だから、ではなく、とにかくやってみる。そうすると思いがけない反応が見られることもあります。

最近、試してみたものを紹介します。まず、席の配置です。ある研修で、「日本の教育は百年前と変わっていない」という話を聞きました。確かにそうです。黒板を前に、みんな

なが同じ向きで、先生を中心に授業をするというスタイル。その型を変えてみました。私
がやってみたのは、U字型です。全ての教科で基本的にU字型に席を配置しました。もと
もと発言の少ない学級だったので、互いの顔が見えることにより、たくさんのよいつ
ぶやきが聞かれるようになりました。さらには、「当事者意識をもたせる」実践です。そ
うすることが、自立・自律を育てることだと学びました。そのために、やってみることが
劇化と宿題廃止です。劇化は、道徳での役割演技、総合的な学習の時間で課題を把握す
るために状況を劇化する、国語で登場人物の心情に迫るために劇化するなどです。そうす
ることで、表面的な答えでなく、本当の気持ちに気付くことができ、さらには人前で表現す
ることが苦手な児童が自分なりの言葉で話す姿も見られるようになったのです。そして、
宿題廃止です。まずは、学級（六年）の子どもたちと話し合い、意見を聞きました。不安
がる子もいましたが、みんなが納得する形を話し合い、実施に踏み切ることで、自ら課題
を見付け学習に取り組む姿が見られるようになったと思います。

これらの実践を通して感じたのは、「担任が子どもたちのよい手本にならなければなら
ないわけではない」ということです。目まぐるしく変化していくこれからの時代を、子ど
もたちにはたくましく生き抜いてほしい、そのために自分はどう関わりをするべ
きかを考え、実践することが大切なのだと思えます。私が児童の自立・自律を目指すべ
組んだ結果、最終的には担任は脇役になっていました。子どもたちは自分で考え、自分た
ちで話し合い、行動に移すからです。なりたい自分を明確にした子どもたちは、とても賢
く強いと思います。私は、これからも子どもたちを信じ、挑戦を続けたいと思います。

那須町立高久小学校

小須賀 沙耶花

「学ぶ楽しさ」を大切に

家庭科の教員になりたいと思っただけは、高校のときだった。高校の自由課題研究でパッチワークキルト作品を製作し、手芸の楽しさを知り、服飾や衣服製作を専門の大学で学んだ。個人的に和装が好きで、和服の平面構成を研究した。もちろん、服飾や和装など他業種にも憧れはあったが、それまで出会った先生方の魅力から、自分も生徒と「学ぶ楽しさ」を共有したい気持ちで勝り、教師の道を選んだ。

初任で勤務した学校、次に異動になった学校、そして今勤務している学校でも、英語科教師がたまたま不足していて、補充教員として、英語の授業を担当した。学校規模にもよるが、家庭科の授業時数は決して多くない。何かしら免外教科を担当することもある。複数の教科の学習指導をすることは教材研究などで大変な面もあるが、生徒の様々な姿を知ることができてよかったと今では感じる。教科の特質の違いを考えつつも、何よりも「授業を英語で楽しむ」ことをモットーにただただ夢中に授業を行っていた。今振り返ると、私の英語の授業で生徒に必要な力が身に付いたのかは疑問だ。自分が教師となった当時、家庭科の授業は現在と異なり、現在では履修しない被服製作などもまだあった。選択家庭の授業では、通常の授業では扱わない手芸の編み物や染め物、浴衣など和服や洋服の製作を扱い、作品作りを楽しんだ。調理の授業では、様々なお菓子を生徒と楽しみながら作った。あまり難しいことは考えず、ただモノづくりの楽しさを生徒と自由に純粹に味わうことだけを考えていただけで、いたってのんきな教師だった。

時は、平成から令和に移り変わり、学習指導要領も大きく変わった。大量生産、大量消

費の時代は終わり、持続可能な社会を構築していく中で、生徒が生きる未来は予測困難な時代が変わってきている。それに伴い、年々個々の生徒の生活経験が変化しており、指導方法や教育課程の変更、工夫改善も求められている。家庭科の学習の存在意義を考えたり、義務教育最終段階で育てなくてはならない資質・能力をどう育てるかを考えて授業づくりをしたりと、自分自身の意識もだいたい変化した。限られた授業時数でどうしたら生徒が主体的に学べるか、どうしたらうまく生徒に伝わるか言葉や指導内容を精選したり、指導方法を工夫改善したりすることが日々の教材研究の中心となった。窮屈なルールを走らず、もっと自由に楽しめたらなど昔を懐古する気持ちもないわけではない。しかし、地域の方と連携して授業を行ったり、他教科、特別活動等と連携して学びを生かしたりして工夫して授業を進めてみると、日常とは異なる生徒の豊かな表情が見られたり、私だけでは伝えることができなかった専門的な知識や技能、感性など多様な学びを生徒が経験できたりと、新たに分かったことも多い。

以前、この『先輩教師からのメッセージ』で恩師が他に「真似ぶ」大切さを述べられていた。以来、仕事の合間に茶道の稽古を続けている。師から教えをいただき、教えに感謝することや教わる側の気持ちを体感することで、自分の教えを省みるなどよい学びの機会となっている。「知らなかったことを知る楽しさ」「できなかったことができるようになる喜び」は、自分を変えた。これは生徒においても同じだと思う。生徒の未来に生きる力を育むことのできるこの仕事の喜びに感謝し、可能な限りこれからも工夫を重ねて「学ぶ楽しさ」を伝えられるようにしていきたい。

日光市立大沢中学校

旭山 晴美

音楽の授業を通して得たもの

音楽の授業は年間を通して、中学一年生が四十五時間、二、三年生が三十五時間で、歌唱・器楽・創作・鑑賞などの様々な領域を学習します。少ない時間の中で、目の前の生徒にいかに関心をもたせるか、より豊かな音楽を表現するためには何が必要か、常に最善の方法を考えて、生徒にアプローチしています。特に合唱指導では、クラスごとに課題を把握し、そのクラスに合ったやり方を模索しています。最初はどううまくできなくても、一生懸命に取り組む姿や上達していく生徒の姿に、日々やりがいを感じています。

音楽の授業を通して実感していることは「音楽嫌いな生徒はいない」ということです。嫌いと感じている生徒は「音楽の授業が嫌い」なのかもしれません。それは個人の技能の差や今までの経験から嫌いになってしまったり考えられます。中学生は変声の時期を迎え、急に声が出しにくくなったり、音程が不安定になったりします。みんなと同じ声が出せなかったら、歌うことも楽しくないでしょう。そういう状態の生徒には個々にアドバイスをしています。「今の時期は音域が狭いから無理しないで」「周りの声をよく聴いて歌おう」など。ありきたりの言葉ですが、苦手な生徒でも向上心は必ずもっています。その気持ちこそが、音楽の授業嫌いをなくす一歩と考えています。教師の何気ない一言が生徒の心に響くと信じ、日々言葉を掛けています。

今まで学んだ知識や経験が教育現場で武器になることは間違いありません。自分にとって必要な情報を取り入れ、自分を常にアップデートすることが大切です。私は音楽教育の月刊誌を定期購読し、他県の先生の実践や情報を取り入れるようにしています。また、音

楽の研修の機会を見付け、積極的に参加しています。関東ブロック大会や県音楽部会の研究授業、宇大附属中の研究授業、東京の中学校の公開授業など、様々な研修会に参加しました。研修会は自分の向上心を高めるきっかけとなります。

また、我々の周りには各教科のスペシャリストがたくさんいます。他の先生の実践は、自分の教科指導や生徒指導に生かすはずです。前任校では、週に一回、研究授業がありました。ICT機器を駆使して、視覚的に分かりやすく示していた社会の授業、対話的な学習を取り入れた数学の授業など、自分の授業にも取り入れられる実践がたくさんありました。各教科の先生の取組を知るとは、自分の世界を広げることにつながると感じます。教科に関係なく、先輩の授業を参観し、様々なことを吸収するとよいと思います。

今後の私の課題は「音楽科教育とICT」です。音楽の授業において、ICT機器を適切に使い、教育的効果を上げることです。実践例を参考に、何が効果的かを日々模索しています。勤務校では今年度から生徒に一台ずつタブレットが貸与されており、授業で使うことが増えていきます。音楽の授業においても、ICT機器の使用は欠かせないものになると感じています。先日は表現領域の創作活動でアプリを使って旋律をつくる授業を実践しました。「簡単に音楽がつくれて楽しい」「またやってみよう」と生徒からも好評でした。また、デジタル教科書や学習支援のアプリを使った授業も取り入れています。今後生徒のために何ができるかを日々模索していきたいと思っています。

さくら市立氏家中学校

西脇 紀子

授業を創る

私は外国語科の教員である。初任者研修で「英語を英語で教えるように」と指導された。当時は、「英語の授業改革」が急速に進められ、その一環として「英語を英語で教える」ことが求められ始めた頃であったと記憶している。大学卒業後、予備校教師をしていた私は文法を教え込む意識が強く、「文法用語も英語で教えるのか?」「学力が落ちたらどうしよう」と悩んだものだった。多くの先生方は「入試が変わらないのに授業を変えることはできない」と否定的であった。私も内心そう思っていたが、「やるしかない」という思いで少しづつ「授業改革」に取り組んだ。悩みながら授業を創っていく中で、自分が行っていることは間違っていないと思いついた。生徒たちが生き生きしていたからである。同じ学校や地区内の先生方にも広めたいと思っていたが、「学力が下がるのではないか」という心配があり、多くの先生が踏み切れていなかった。結論から言うと、学力が下がることはなかった。むしろ、意欲が高まり、学力も向上したのではないかと思う。それが分かれると、徐々にではあるが私の授業改革が理解され始めた。教員四年目の時、総合教育センターから「英語で英語を教える方法」の動画制作を依頼された。今考えると、何の知識もないまま作ったので恥ずかしいが、これにより以前の授業には戻れない覚悟ができた。

九年目にして初めての異動。この学校の二年生には、英語が堪能な生徒がいた。その生徒にとっても満足できる授業を創ろうと奮闘した。コミュニケーション活動を授業の軸にし、どの生徒にとっても分かりやすい授業をする努力をした。私の授業改革が更に加速する機会となった。そんなある日、私の教員人生を大きく変える出来事が起きた。文部科学

省と外務省が主催する「日本人若手英語教員米国派遣事業」に参加することになったのである。私はアメリカのカリフォルニア大学アーバイン校で半年間、第二言語として英語を学ぶ人たちにどのようなように英語を教えたらよいのかについて学んだ。宿題や発表の多さに圧倒されながらも、大変充実した日々を過ごすことができた。ホームステイをしながら過ごした半年間は決して忘れることはできない。帰国後の授業を意識して撮りためた写真は、今でも生きた教材として授業で使っている。講義や実習で学んだことをどのように授業に生かしているかは、ここでは紹介できないが、私に「こんな生徒を育てたい」と決意させた出来事について紹介したい。大学には様々な国から語学研修に來ている学生がいた。中東から來た学生の多くは、英語で自分の意見を積極的に発表していた。英語の正確さは決して高いとは言えなかったが、十分コミュニケーションが取れていた。一方、日本人の大学生は自分から意見を伝えようとすることが少なかつた。また、英語の正確さはあっても流暢さが欠けていた。「英語を使って自分の意見を積極的に伝えられる生徒を育てなくて」と心に誓った。授業で英語を使うことに慣れさせなくてはならないと改めて思い、授業内容を大きく変えるきっかけとなつた。

今でもあの時に心に誓つたことは忘れないようにしている。理想の生徒像が明確にあるため、一時間一時間の授業で何をすべきかがはっきりしている。活動の内容や順番も深く考えるようになった。どんな生徒を育てたいのかを考え、長期的・短期的な目標を立てることは重要である。「十年後」「一年後」「次回の授業後」の生徒の理想的な姿をイメージしながら今日も授業創りに励んでいる。

那須塩原市立黒磯中学校

石井 宗宏

螺旋に連なる知の高みを目指して

たくさんの生徒たち、同僚、県内外の教育関係者の皆様と出会い、本当に多くのことを学ばせていただきました。数多の出会いから学んだことが螺旋状に連なり今の「私」を形作っているのだと思うと感謝の気持ちしかありません。いつまでたっても未熟な私ではありませんが、これから、同僚の先生方や生徒たちから学んだ、学習指導をする際に常に心に留めている三つのことについて、お伝えしたいと思います。少しでも参考になることがあれば幸いです。

一つ目は、「必要とされる人材になる」ということです。私たちは決して教科書の中身を生徒に押し付けてはならず、学び考える楽しさを知る先達として、生徒たちに信頼され必要とされる存在であるべきだと思います。したがって、生徒の授業中の質問にすぐに答えられなくてもいいのです。決してごまかさず、しっかりと調べてから真摯に答えるべきなのです。事実、体裁を取り繕うことなく学ぶ姿勢や手段を示すことは、生徒の主体的な学びに繋がってきたように思います。

二つ目は、「本質を忘れない」ということです。もちろん、その日その時の授業の目標はありますが、目の前の生徒たちの十年後、あるいはもっと先の人生を念頭に置いた授業実践を大切にすることです。そう言う私も教員になつてしばらくは、教え込み型のいわゆる教科書の内容を「分からせる」授業を行っていました。アンケート調査で「授業は分かりやすい」の項目の評価が高かったり、定期試験の平均点が高かったりしては安堵していました。その後、同僚の先生方や他県の先生方の多くの授業実践に触れる機会に恵

まれ、知的好奇心を喚起し進んで学習に向かう姿勢を養う授業や試験（定期・実力）の意義について思い至り、本質を根幹に据えた実践の大切さを実感しました。もつと知りたい、分らないからこそ分りたい。そういう思いを抱かせる魅力的な授業が、自主学习を促し、さらに深い思考を導く高次の授業へと螺旋状に連なっていくと確信しています。

三つ目は、「授業は生徒と共に創る」ということです。授業内容は同じであっても生徒が違えば全く同じ授業展開になることはありません。一度教えた内容を他クラスや他学年で教える際は漫然とした指導になりがちですが、生徒が違えば疑問点も異なります。それに応じて発問も当然異なります。教室内の空気も変わり、指導目標に辿り着くプロセスも変わります。私たち教員は、観客を無視した独りよがりな演技によって舞台上で失笑をかう道化になってはいけないのだと思います。教室は、新たな気付きがあり感動があり歓びのある空間であるべきであり、それはその空間にいる皆で創り上げるべきものであるはずです。そのためには、入念な教材研究と明確な指導目標の設定、発見や思考の深まりに繋がる学問的な質、そして何よりも教師自身が楽しむ心が大切なのだと思えます。

私は教師になれたことを本当に幸せに思います。そして生徒たちに心から感謝していません。生徒たちと共に学び、楽しい時間を過ごしてきたからです。もちろん、自尊心からなぜ分かってくれないのだと傲慢な授業をした時もありました。教え込むことばかり考えて、生徒の厳しい視線に孤独や不安を覚えた時もありました。そうした中で悩み導き出した答えが、生徒と共に学ぶことを楽しむというものでした。教壇を離れるその日まで螺旋に連なる知の高みを目指して生徒と共に学びを楽しんでいきたいと思えます。

県立宇都宮女子高等学校

黒川 治彦

全ての基本は授業から

自分の保健師としての専門的知識と地域活動の経験を、高校の福祉教育の現場で生かしたいと思い、教員採用試験にチャレンジしてから、早いもので十年以上の月日が経った。採用当時の私は、「現場での経験や地域の高齢者や福祉サービスの實際を、生徒に伝えたい」そのことを教えることだけに重きを置いていて、上から目線であったと反省している。初任者としての毎日、日々の授業のために、教材研究に多くの時間を費やした。授業時間は一時限五十分と決まっているのに、生徒に伝えたい内容は山ほどあり、限られた時間の中でどう教えるか、それが自分の中の一冊の課題であった。そして、授業中は時計で残り時間を見て、今日の予定している内容が、時間内に終わるかを気にしながらの展開で、どこか、自分中心の授業をしていた。

そんな時、教科の先輩教員に、「こんなアドバイスをいただきたい。「同じ教科は、もちろんだけど、他の教科の先生方の授業も見学してみたら：」と。それは、私に多くの気付きを与えてくれるきっかけとなった。同じ教科の先生方の授業は、指導内容のポイントに着目して授業を見学していたが、他教科の先生方の授業は、話し方や生徒との関わりに着目して授業を見学することができた。興味・関心を引くためには、どのような話題から授業に入ればよいのか、発問に対して生徒の反応がなかった場合の対応や授業での生徒の意見の取り上げ方等、他教科だったからこそ、気が付くことがたくさんあった。私は、社会人として専門知識や経験はあったものの、教える専門である教員として自分の視野の狭さを感じた。私が見ていたものは、時計やテキスト等の物であって、目の前の生徒ではなかつ

たのである。何と、もったいない時間を過ごしていたかと反省するとともに、気が付いてよかったと、ただただ感謝するしかなかった。それからというものは、生徒の反応を大切にしながら授業を展開するように心掛けている。生徒の反応を見ることがは、生徒の観察であり、単に、授業内容についての生徒の理解状況だけを意味するものではない。「いつになく反応がよいな」「何だか、疲れているな」等、生徒の授業中の様子だけでも、日によって変化がある。そこから、何かあったかな？という気付きにつながり、些細な変化から生徒とのコミュニケーションに発展し、信頼関係を深めるきっかけにもなる。授業という、毎日の何気ない場面からも、得られることが数多くある。

介護福祉士の国家試験を受験する専門学科は、学習指導の点からは、どうしても、国家試験合格のための知識や技術の定着という、結果に重きを置きがちになってしまふ。しかし、本来の福祉教育は、生徒の人生をより豊かにするものであり、日常生活の中で、学習内容を実感できるようにしなければ、本当の学習価値は見いだせない。私は考えている。学習内容が定着しているか、また、単なる暗記にとどまっていないか、今日の授業での学びが、生徒の日常生活や将来に生かせるよう、学習内容と実社会での活用を考え、授業を展開している。長い教員人生の中では、「次の授業の機会」があるかもしれないが、生徒にとっては、その内容を学習する機会は、「今」が最後の学習機会かもしれない。教える内容は最新のものであり、解釈に誤りや偏りはないか等、教員として年数を重ねても、目の前の生徒の豊かな学びのために、責任をもって日々の授業を展開していきたいと思う。

県立真岡北陵高等学校 柳 路子



「授業」について考える

よい授業とは、どのような授業でしょうか。「分かりやすく教える授業」をイメージするかもしれませんが、しかし、この「分かりやすく教えようとする」ことが、時に子どもたちの考える機会を奪い、学ぼうとする意欲をそいでしまうことがあります。例えるなら、推理小説を読み味わう前に、犯人の名前を教えてしまうようなものです。

本冊子の内容からも、子どもたちに主体的に考えさせることの重要性が分かります。学習指導における教師の大切な役割は、子どもたちの興味・関心を引き出し、思考を促すことにより、深い学びを実現することです。子どもが「解きたい!」「考えたい!」と思うような課題との向き合わせ方、学習問題の設定、学習展開の工夫などが重要と言えるでしょう。

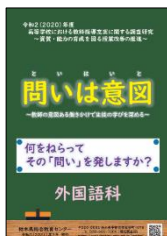
子どもたちにとっては、当然「分かる」ことや「できる」ことも喜びの一つです。しかし、困難な課題にチャレンジし、仲間と共に試行錯誤しながら自分なりの答えを導き出したり、考え続けて新たな疑問や課題を発見したりすることには、もっと大きな喜びを感じるのではないのでしょうか。

予測困難な時代と言われていますが、未知なる課題に前向きに挑戦し、失敗してもあきらめずよりよい答えを追いつける。そのような意欲に燃える次世代の子どもたちを育てていきたいものですね。

関係資料のご案内



「『見方・考え方』を意識した授業づくり」
(小・中の各学校段階)
栃木県総合教育センター
2021年3月



「『問いは意図』」
(高等学校段階)
栃木県総合教育センター
2021年3月



個性や社会性の伸長を目指して

大切な子どもたちのために

私は、小さな頃から幼稚園教諭に憧れ、短大を卒業し念願の幼稚園に就職をした。期待に胸を膨らませながらいざ保育をしてみると思うようにいかず、思い描いていた仕事のイメージとは異なっていた。先輩保育者に付いていくことに必死で、一日を過ごすことで一杯の保育だったように思う。目の前で意見を交わす先輩に圧倒され、分からないことや困ったことがあっても、誰に相談していいのかも分からず、一人で抱え込むことが多かった。体調を崩して休んだり早退したりすることに抵抗を感じるような状況だったため、今思うと本当に大変な新任の一年間だったと懐かしく感じる。しかし、この一年間を無事に過ごせたことは、保育の仕事の基礎になり、自信にもなったのかもしれない。

二年目は、一年目の経験を糧に「次はこうかもしれない」と慌てずに保育に取り組めるようになっていった。そして三年目以降からは「もつとこうしたい」と自分のやりたいことや考えが見付けられるようになり、保育に向かう姿勢が変わっていったように感じる。子どもたちと過ごす日々がますます楽しくなり、一生懸命になればなるほど、子どもたちからの反応が返ってきて、何よりも笑顔が見られることがうれしくてたまらなかった。

そのような中、行事「お店屋さんごっこ」での出来事である。当園のお店屋さんごっこは異年齢で行われ、みんなで話し合いながら作りたい品物を決めて、子どもが活動を進めていくのだが、その頃の私は、子どもたちの意見を都合よく切り取り「こういうことだろう」と自分の経験や考えから答えを決め付けて進めてしまっていた。そのため、子どもたちとの考えやイメージがすれ違い、せつかくの楽しい活動がそうならなかったことがあつ

た。

一番大切にしなければならぬ子どもたちの思いを見過ごし、過程より結果を気にしてしまっていることに、はっと気づいたのは様々な研修に多く参加するようになってからだと思う。研修で学んだことで、自分自身の保育を見つめ直すよい機会となり、保育を振り返り、記録に残すことをきちんと行うようになっていった。それまでも記録や反省は行っていたが、皆で話し合い、意見を交わすことができなくなったことで、より記録が生きていくと感ずることができた。研修だけでなく、他園を見学に行く機会もあり、好事例を参考にできたことや、職場の環境、働き方の変化も影響があったように思う。

今は、子どもたちのその時の姿に合った保育を心掛け、行事内容について教員間で話し合い、意見を出し合いながら計画を立て実施している。当たり前になつていたことを見直すことで、時間と心にゆとりができ、子どもたちと一日一日を楽しく過ごすようになった。日々の保育の中で上手くいかないことや不安になることもたくさんあると思うが、何度失敗したとしても、その経験こそが自分の宝物となる。次に生かすことこそが大切だと思う。勤務年数だけが保育に幅をもたせるのではないと思う。いろいろな意見を取り入れるべきだと思う。型にはめるのではなく、目の前にいる子どもの姿を柔軟に捉え、一人一人との関わりを大切にしながら、何より楽しい保育を目指してほしい。

「大切な子どもたちの笑顔が見たい！」これこそが私が今まで保育者続けてきた原点なのだと感じ、子どもの笑顔が自分自身も笑顔にしてくれていたのだと、この機会をいただき思い至った。皆さんにもぜひそう感じてほしい！

認定こども園愛泉幼稚園

石島 あさみ

分岐点

私は、保育者になって三年で一度目の職場を退職した。他の仕事もしてみたいという思いからであったが、今になって分かることは隣の芝生が青く見えたのだと思う。仕事を辞めて次の職を探し始めた頃、学生時代の友人から保育の話聞く度に、嫉妬心のようなものもやめた感情を抱くようになった。そしてようやく気付いた。「ああ、私は保育の仕事が好きだったのだな」と。そこから新たな気持ちで就職活動を試みるも、今の世の中のような保育士不足ではなく、就職氷河期で、中途採用の正職員の募集は、ほぼ見付からない。臨時職員や病院の託児所で働きつつ職業安定所にも時折足を運んだ。現在の園から声を掛けてもらい、幼稚園教諭として再スタートを切るまでに四年ほどかかった。

新しい職場は、今でこそ職員数は多いが、当時は少なく、アットホームな職場だった。そんな温かな職場で、私は毎日が楽しくて仕方なかった。幼稚園バスも、クラス担任という責任感も、持ち帰りの仕事でさえも、すべてが私の心を躍らせた。来月の壁面は何にしようかな、この話をしたらどんな反応がくるかな、私の頭の中は園の子どもたちでいっぱいになった。

しかし、月日が経つにつれ、楽しさはプレッシャーに変わっていった。クラスをまとめなければ、学年を引っ張っていかなければ、仕事ができない先生なんて絶対に思われたくない。私の頑固で負けず嫌いな面が空回りし始めた。

ある年私は、年長組を受け持っていた。クラスには特別支援を必要とする子が三名いた。それぞれ自閉症、ダウン症、精神運動発達遅延（Ｙちゃん）であった。クラスの子どもた

ちは当たり前に関わり、三人が困っている時にさりげなく手助けをしてくれる、とても思いやりのある優しい子どもたちだった。

そのような中で、ただ一人、私は焦っていた。運動会の練習、遊ぶ時間の確保、給食：頭の中は時間を無駄にしないスケジュール調整であふれていた。保育室から昼食をとるラシールームまで子どもの足で二分程の距離だろうか、その距離でさえも瞬間移動したいと思っていた。足取りが速くなっていた私に、ある女の子が投げ掛けた。

「先生、Ｙちゃんに合わせてあげようよ！」

私は、はっとした。時間が一瞬止まった。振り返るとＹちゃんは自分の精一杯の歩ける速さで速足の私に必死についていこうと歩いていった。なんだか涙が込み上げてきた。何に焦っていたのだろう。周りが見えていなかった。恥ずかしい。

「そうだよね、先生慌てちゃっていたね。ごめんね」

その頃から私は焦るのをやめた。とりあえず一呼吸置くことから始めた。時間を気にしすぎるのもやめた。子どもたちの反応や思いを一番に考えるように心掛けた。

幼稚園の仕事は楽しい。やりがいもある。「ありがとう」と年度末に子どもや保護者から言われると、すべてが報われた気持ちになる。これがあるから保育の仕事はやめられない。まだまだ人としても保育者としても未熟だが、迷ったとき、焦ったときに、立ち止まって振り返りができる柔軟な保育者でありたいと思う。そして、何よりも子どもたちとの今の時間を楽しんでいきたい。

認定こども園黒羽幼稚園

田口 裕美

学業指導の充実を目指して

現在、私は茂木町学力向上推進リーダーとして、茂木町四校の先生方と日々の授業改善に向けて取り組んでいます。これまでの教師生活を振り返り、「学業指導の充実」に向けて、取り組んできたことをお伝えしたいと思います。

まずは、学びに向かう集団づくりが大切です。話が聞けない、安心して自分の考えが言えないクラスでは、どんな手立てを講じてもよい授業とはなりません。私は、次の三点を特に意識して取り組んできました。①一人一人を大切にすること。一人一人のよさを認め、生かすことを心掛けました。褒める・認める言葉掛けを多くすることにより、プラスの行動が多くなったり、子どもの自己肯定感が高まったりして、クラス全体の雰囲気がとてもよくなっていきました。②話をしっかり聞くことができるようにすること。教師や友達の話を聞きながら、反応（相づち、つぶやき）することを指導しました。自分の話を友達がよく聞いてくれることで、頑張って話そうという気持ちが生まれます。途中までしか話せなかったとしても、友達がつないでくれる（助けてくれる）ことが分かっているので、安心して話すことができます。よい聞き方ができるクラスは、よい話し方もできるようになっていきます。③「分からない」と素直に言えるクラスにすること。間違ったからこそ学べるものが多くあることを体験させていくと、自分の考えを書いたり、説明したりすることに、より積極的に取り組めるようになっていきます。①～③の取組は、いずれも一貫した指導を継続することが大切です。ある場面では指導し、ある場面では指導しないということでは、指導を徹底することはできません。

また、学びに向かう集団づくりと並行して、「楽しい・分かる・学び合う」授業づくりを心掛けることが大切です。次の六点を特に意識して取り組んできました。①単元の学習を通して、子どもにどのような力を付けたらよいのか、指導内容を確認し、学習計画を立てること。身に付けるべき力を意識して、学習活動を考えていくことが大切です。②系統性を意識すること。既習事項は何か、今後どのような学習につながるのかを確認します。授業では、既習事項を活用して考えられるようにしていきます。③導入を工夫すること。子どもの日常生活と関連した内容での導入を心掛けました。「くしたい」「なぜ？」を引き出すよう、問題提示や発問の仕方を工夫しました。④隙間の時間を作らないこと。自力解決の際は、時間を指定し、時間いっぱい取り組むことを指導しました。書いた文章を見直すこと（推敲の力を付けるため）、出た答えを見直すこと（求める数量と全く違っても気付かないということがよくあるため）、別の方法でできないか考えること、友達にどう説明するか考えること等、具体的に指導していきました。⑤学び合い（集団解決）の時間を多く確保すること。友達のを考えを知ることにより、自分の学びが広がり深まったりしていきます。自分の考えに付け足すことや新たに分かったこと等をノートにまとめる時間も確保するように努めました。⑥確かな学力の定着を目指すこと。その学年で定着すべきことは、確実に習得できるように取り組みました。子どものやる気をアップさせるため、数値目標を決めたり、頑張りカードを活用したりしました。

集団づくりと授業づくりの相互の関連を図ったこれらの取組は、当たり前のことばかりです。当たり前のことを根気強く取り組んでいくことが、「学業指導の充実」につながると思います。

茂木町立茂木小学校

箕輪

尚子

これからも大切にしていきたいこと

教員としての経験が二十年を過ぎ、「ミドルリーダー」としての自覚と責任が求められる立場となりました。教員になりたての頃は、教師という仕事に、自分なりの理想を思い描きながら、無我夢中で過ごしてきた気がします。だから、子どもたちに自分の思いを熱く伝え続けられれば、理解してもらえらるだろうという、根拠のない安易な考えがありました。日常の指導は、まさに力技で対応することが多く、これまで数々の反省をしてみました。でも、これらの経験が教師としての自分を成長させ、これまで歩んで来られたのだと感謝しています。

そんな私が、今心掛けていることは、子ども一人一人を見守ることと、指導や対応にしないやかさもつことです。子どもたちは、大人と同様に、様々な人間関係の中で生活しています。そして、自分なりの思いや考えをめぐらせ、時には迷い苦しみながらも、一歩ずつ前へ進み、絶え間なく成長しています。私には、教師として、一人の大人として、子どもたちを支え、見守っていく責務があります。見守るには、子ども一人一人の姿をよく見て、声に耳を傾け、寄り添うことが大切だと考えます。ただその時に、私がさらに大切だと感じたのは、子どもとの距離（距離感）です。

私は、ある児童との関わりの中で、このことを深く考えさせられました。この児童は、こだわりが強く、自分の思いや価値観にそぐわないと、しばしば感情が高ぶり、衝動的になります。八つ当たりに、あるいはそのきつかけとなった相手に対して報復的に、感情を物にぶつけたり、時には相手に暴力を振るったりしていました。周囲から「困った子」

と見られてしまうような児童でしたが、関わっていく中で、「困っている子」であると気が付かされました。普段の会話で、本児に寄り添い、共感的に聴いていくと、さまざまな思いをくみ取ることができました。自分の中で頑張りたいと思っていること、頑張っても結果がよくなかったらどうしようという不安、親の期待に応えたいという思い、それに対するプレッシャー……。初めは何気ないやりとりでも、本児との距離を縮めていくと、普段は表面に出さない複雑な思いが伝わってきました。一方で、こだわりがあるが故に、指示をしつこくされることを嫌がりました。私は本児に選択の幅を与え、判断を委ね、本児の思いを大切にしました。そして、距離をおきながらも、様子をよく観察し、適宜声を掛けることで、安心して取り組めるように努めました。

言うまでもないことかと思いますが、自分と子どもとの距離（距離感）には、物理的なものと精神的なものがあり、自分と子どもとは捉え方・感じ方が違います。そして、物理的に離れていても、気持ち的には近く感じたり、物理的に距離を縮めようとすればするほど気持ちは離れていったりと、物理的な距離と精神的な距離（距離感）は一致しません。環境や心理状態、人間関係等によって大きく変化するものです。だから、この距離が正解というものはなく、探っていくことが大変難しく、面倒なことにさえ感じるかもしれません。距離を探ることは、距離感を共有しようとして探っていくことではないかと考えます。さまざまな角度からアプローチし、子どもの反応や状況をしっかりと把握しながら、柔軟に対応していくしなやかさがが必要です。私はこれからも、子どもとの距離を探りながら、思いや考えに寄り添い、見守っていただける教師を追い求めていきたいと思えます。

足利市立富田小学校

内田 祥弘

私が生徒指導で大切にしていること

私の生徒指導を振り返ってみると、初任から二校目となる中学校での経験が大きな転機となった。初任校で学んだ学級経営や学習指導を新天地でどのように生かしていくか期待に満ちていた。しかし、その思いとは裏腹に、現実はその甘いものではなかった。

私が、担当したのは一年生の担任だった。集団生活への意識が低く、学級内でのトラブルが入学当初から立て続けに起きた。学級経営どころか、クラス全体に落ち着いて話を聞かせることすら困難な状況だった。

学校全体がそのような状態であったが、職員室の先生方は明るく一体感のある雰囲気だった。また、頼りになる先輩の先生方からアドバイスをいただいたり、実際に指導をする姿を目前にしたりできたことは心強かった。そして、学校の方針で「生徒は学校で責任をもつて指導する」という考え方が浸透していた。問題行動を繰り返し、学級での生活が困難な生徒に対し、別室で教員が対応する方針だった。この別室での時間が大変重たい時間ではあったが、私の生徒指導への意識を変えるきっかけとなった。

別室で生徒が見せる姿は様々であった。何を語り掛けても反応しない。そのまま時間だけが過ぎていき何も進展しないまま終わってしまう。また、こちらの目を盗んで逃げる。私がいようが強引に制止を振りはらって逃げる。自分の非を認められずに言い逃れを続け、謝罪の場をもつことができずに問題がこじれていく。どの生徒にも、共通して言えるのは、私の話が全く心に響かないということだった。自分の指導力の無さを痛感し、この現状を受け止めるほかなかった。

私は、どうすべきか悩み考えた。そして、今までの指導は生徒に対して配慮なき関わりであったことに気付いた。失敗をしてしまった生徒の気持ちに寄り添うことなく、ただ正しいことを伝えるだけの指導だった。

それ以来、まず始めに意識したことは、生徒の置かれている環境や背景を理解することだった。失敗をしてしまうには必ず理由があつて、その部分への共感を示すことは生徒を大切に思うメッセージとなる。生徒に語り掛ける表情や声の抑揚が変化するのを実感できたことをよく覚えていいる。生徒からの反応も増え、話が伝わっていると実感できるようになったのもこの頃からだだった。

そういった対話が成立するようになり、次に意識したことは正しいことをきちんと言指導するということだった。生徒の置かれている立場や状況については理解し受け入れるが、「ダメなものダメ」とはつきり言い切ること、そして納得させることだった。そこまでに築いた生徒との親和的な雰囲気や壊すことになり、勇気のいることである。しかし、しっかりと生徒と向き合った。眉間にしわを寄せて、声のトーンを下げて叱り、諭した。

これらのことを意識して生徒との関わりをもち続けた。生徒自身の行動にすぐに大きな変容はなかったがそれでもいいと思つていいる。そう簡単に人の考え方は変わらない。大切なのは、生徒一人一人と丁寧に向き合い、心に響く、重みのある言葉で語り掛けていくことだと思ふ。そして生徒の様子を温かく見守り、成長を期待していくことだと思ふ。

この中学校で学んだことは、今も私の生徒指導の軸となっている。

鹿沼市立栗野中学校

伊奈川 正通

生徒指導と人とのつながり

私は今年度で教職十六年目を迎えます。これまでの教職生活の中で多くの先輩・同僚・後輩に出会ってきました。現在は、生徒指導主事という立場をいただき、日々よりよい学校にするために自分にできることは何なのかを考えて職務に当たっています。さらに、現在勤務している学校は、新規採用教員として四年間を過ごした学校でもあります。当時は駆け出しで、右も左もよく分からないまま「こんな先生になりたい」と目標を抱きながら奮闘していた日々でした。今は教師としての駆け出しの時期に大変お世話になった大切な学校で恩返し的气持ちも込めて勤務しています。思い返してみれば、今日まで生徒指導を頑張りたいと思い過ぎてきた日々には、思い出深い先輩方の一言があります。

新規採用教員として赴任した当時、ある先輩教師から「新規採用の三年間は自分がどのような教師になるかを決める重要な時期だ。その間に目標とする先生を決めること、決めたら見て学んで真似すること、三年目を過ぎると周囲の先生方からは助言が少なくなる。その時までには自分の生徒指導を身に付けること」と助言をいただきました。この言葉は今も先輩たちによく話をします。自分自身でそのとおりだったと実感しているからです。採用から三年間は、先輩教師の集会での話の内容や話し方、表現、身振り手振り、身にまとう雰囲気など、すべてを真似することから入りました。多くの先輩方のよいところはどこなのか見付け、それらを自分のものにするように心掛けて研修を深めたつもりです。現在もこの姿勢は変わりませんが、この時期に身に付けた生徒指導についての考え方や方法が自分のベースになっていることは言うまでもありません。

二人目の先輩教師は「担任は学年の生徒指導担当者、学年の生徒指導担当者は生徒指導主事、生徒指導主事は学校内に留まらず市内全体というようにワンランク上の段階で物事を見て生徒指導に当たることの重要性」を話してくださいました。この考え方から自身自身が副担任から担任へ、そして学年の生徒指導担当から生徒指導主事へと役割が変化したときに柔軟に対応するための準備ができたと感じています。

三人目の先輩教師は、当時、生徒指導主事だった先生です。教科指導、部活動指導、そして生徒指導など、あらゆる指導の場面でこの先輩を模範として学びました。印象的な言葉もたくさんありますが、多くの助言をいただき、教師としての考え方の基本を教えてくださいました。現在は、自分が生徒指導主事という立場に立ち、この先輩であればどのよう判断しどのよう考え、どのように動くべきと考えたかを意識していることが多いです。当時赴任していた学校には、生徒指導主事としての経験が豊富な先輩教師が多くおられました。その先輩方の教えも自分にとってはかけがえのないものです。

まだまだ挙げればきりがなくらい多くの先輩・同僚・後輩の先生方から、水分を吸い込むスポンジのように多くのことを吸収し、現在の自分が構築されていると思います。そして、現在もその方々とのつながりは続いており、自分自身が悩んだり、立ち止まったりしたとき、相談できる存在です。現任教にも多くの信頼できる同僚がいます。校長はよく「チームとして」とおっしゃっています。私はチームの中核として、これからも学び続け、多くの人とつながり続けようと思っています。

小山市立桑中学校

相羽 克隼

私の三つの心掛け

私は十年近く生徒指導部長を務めています。当時から私は、生徒の話をよく聞くこと、生徒には粘り強く伝えること、授業を大切にすること、放課後や土日にはなるべく部活動の指導に行くことを心掛けてきました。この姿勢は今も貫いています。継続して頑張っていることがあれば、見ていてくれる人はいると思います。もちろん、その分野は人によって異なり、進路指導や授業研究の分野かもしれないかもしれません。先生方の仕事を支援する分野の場合もあるでしょう。私の場合は、生徒・保護者や同僚のためになればと思っ取り組んできた結果、生徒指導を任せてみようと思っチャンスをくれた人がいたのだと思います。

現在、具体的に私が心掛けていることを三つ紹介します。

まず、一つ目は基本を知ることです。私は立場上、生徒指導部長が集まる機会や研修が年に数回あることと、生徒指導関係の文書が回ってくることで、自発的に動かなくても学ぶ機会があります。しかし、全員の先生方にそのような機会を訪れませんし、基本を知ると言ってもどこから手を付ければよいのかも分からない人もいると思います。そこで、私はまず、『生徒指導提要（平成二二年三月文科省）』を読んてみることをお勧めします。この前書きに「生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」とあります。もちろん、全部読むことが望ましいとは思いますが、自分の学校で起こったことについて辞書的に引いてみたり、自分の興味や不安のある内容について部分的に読んだりするだけでも勉強になります。少しの時間をとって、週または月に一度読んてみるだけでも、教員としての在り方に対する意識が高まる機会になると思っています。さらに、これには具体的な留意事項も書

かれています。例えば近年「ブラック校則」の問題が話題になっていますが、校則に関する項目も設けられており、「校則の内容は、社会通念に照らして合理的とみられる範囲内で、学校や地域の実態に応じて適切に定められる。教員がいたずらに規則にとらわれて、規則を守らせることのみを指導になっていないか注意を払う必要がある」とまとめられています。さらにもう一冊、基本を押さえる上で欠かせないものに『いじめ対応ハンドブック（平成三十一年三月県教委）』があります。いじめが深刻な問題であることは誰もが知っていますが、いざ防止に向けて対応しようとする、うまく進まないことも少なくありません。私の経験の中でもそう感じたことが何度もありました。この冊子は見やすくとめてあり、私は常に所持しています。実際にいじめの認知があったときに読み、抜けていることはないかをチェックしています。この二冊で、確かな「基本」を知ることができずです。「基本を押さえた」上で自分の考え方をもてれば、さらに素晴らしい指導ができると思います。

二つ目は、研修を大切にすることです。私は講話や研修の内容を理解するのはもちろんのこと、研修で講師の方に紹介していただいた本を必ず読むことにしています。今まで紹介していただいた本は自分の刺激になり、自分の見識を高めてくれました。

三つ目は、危機管理の意識をもつことです。他のクラスや学校での出来事、世の中の学校関連のニュースなどに関し、自分のクラスや学校で起きたらという視点で、自分ならどうするか、自分の学校ならばどう対応するのかを考えてみる。この姿勢がクラス、学校の点検・評価や改善につながり、不測の事態にも落ち着いて対応ができるようになるのではないかと思います。

県立小山南高等学校 栗原 英男

心に留めている二つのこと

ありきたりではありませんが、「経験から学ぶ」ということを大切にしたいと思っています。教育相談を長く担当してきたことで、生徒指導や保護者面談に関わる機会が数多くありました。経験豊かな先輩方がどう指導・対応するのかを目の当たりにできたことは私の大きな財産です。またそういった機会でなくとも、日々の様々な（特に困難な）場面で、年齢やキャリアを問わず尊敬する同僚たちがどう考え、判断し、行動するのか、自分ごととして捉えていくことは、間接的な経験として得るものが大きいと考えています。

そして私がこれまでに最も実感を伴って学んだのは、生徒・保護者・同僚、そして自分の「感情を大切にすること」の重要性です。「感情的」という語は、理性に欠け、自律できないことと同義で使われるためか、私は感情というものに負の印象をもっていました。しかしどんなに理性的であろうと試みても、我々は感情や潜在意識に突き動かされて行動しているといえます。自分勝手にこれをむき出しにすることは論外ですが、過度に抑圧し、思考と感情が一致しない状態が続くと、辛さや悩み・体調不良に繋がります。自他の感情をないがしろにすると様々なところで無理が生じ、うまくいかないのが実感です。

面談は生徒との信頼関係を作る大きな機会ですが、「何か有用な助言や情報を提示しなければ」という気負いもありました。もちろんそれが絶対に必要な場面もある一方で、それを求め受容できる状態の生徒ばかりではありません。聴いたり待ったりする姿勢の大切さを知ってからは、面談で生徒が話したいことを話せたかという視点を意識することを心掛けました。自分の気持ちを素直に出す生徒も中にはいますが、むしろ真面目で悩みの深

い生徒ほど自分の感情に無自覚な気がします。思考がぐるぐると渦巻いて混乱し、まさに「自分の気持ちに分からない」状態です。話すことで「そうか、私は今、不安なんだ」と自覚するだけでも安心や信頼に繋がることは、私自身の経験振り返っても言えることです。安心や心の安定があつてこそ、行動する意志やエネルギーに繋がると思います。

保護者への対応が困難だったケースを思い返すと、ほぼ感情的なこじれが原因であつた気がします。また同僚との関係性においても、「理屈では分かるけれど……」と今一つ気持ちよく物事を進められない事態を避け、スムーズに協働するためには、やはり事実や理屈のみならず、お互いの感情を尊重することが大切なのではないでしょうか。

大学卒業後、深く考えずに流されて教職に就いた私が、自らを振り返る機会を頂きました。そして、これまで述べた「感情」と「経験」、この二つは私にとってこの仕事のやりがいや魅力そのものに直結するものだと気付きました。紙面の関係で具体的に述べられないことが残念ですが、私の心に残る場面の数々は、うれしさや悔しさ、寂しさや充実感、全て生徒・保護者や先生たちとこれらの感情を確かに共有できた実感した瞬間です。またこの仕事は、欠点も含めた自分の個性や今までの経験、いわば自分の全てを生かしている仕事です。経験が私たちの価値観や個性を形作っていくのだとしたら、むしろ失敗や挫折があるからこそ他者と良い関わりができるのではないかと考えます。困難の渦中は先も見えず、生徒や保護者の言動に傷つくなど負担もあります。公私ともにトラブルや困難は無いに越したことはありません。しかしたとえそれらに直面しても、周りの助けも借りながら何とか乗り越えることで、より深く、寛く、大きな自分になれたらと思つていきます。

県立小山西高等学校 野口 章代

子どもたちと保護者から学んだこと

「特別支援学校における進路指導について」というテーマで、このお話をいただきましたが、実は進路指導を担当するようになって、さほど経験を重ねておりません。現在は、学校と社会の間に軸足を置いて教育に当たっていますが、以前は、訪問教育学級や早期教育相談の担当として、学校と家庭の間で、子どもたちだけでなく、保護者に近いところで教育に携わってきました。その頃の経験は、教師として自分が歩む道標となっています。

訪問教育学級。それは、障害や病気のために学校に通うことが難しい子どもたちのために、教員が家庭や病院に赴き教育を行う学級です。児童生徒と私の二人だけでなく、時には保護者も一緒に授業に参加しました。訪問教育学級を担当していたときに出会った保護者は、様々なことを乗り越えてこられた強さからか、明るく前向きな方が多く、こちらが元気をもらうことも多々ありました。しかし、そんな保護者が一様に表情を曇らせ、不安な心の内を吐露するのは、決まって、我が子の進路についての話題になったときでした。「障害から卒業後の受入れが難しいのではないか」「将来親が年を取ったときにこの子はどのように生きていくのか」。そのようなことを口にする保護者からは、我が子の自立、幸せを切に願う親の愛をひしひしと感じました。児童生徒、保護者の不安を少しでも軽くし、親子で前向きに将来に向かい合えるよう、教師として自分は何をすべきか考えるとき、いつも思い出されるのは、我が子の将来を思う保護者の表情です。

そして、発達に不安のある就学前のお子さんとは「子どもを多面的に見る」ことの重要性です。早期教育相談室に保

護者とやってくる子どもたちはときに甘えたり、時に保護者に褒めてもらいたくて目いっぱい頑張ったりします。その子どもたちがその後、小学部の一年生として入学してくると、今まで早期教育相談室の中では見られなかった姿、保護者から聞いた家庭での姿とは、全く異なる姿を見せることが多々あります。教師は、学校で見られる子どもたちの姿でその子を理解しようとしがちですが、学校での姿が全てではありません。教師の前では、子どもたちは「いい子」として振舞おうとしているかもしれないし、教師も知らず知らずのうち子どもたちにそれを期待しているかもしれない。また、当然その逆で、家庭でそのような姿を見せることもあるでしょう。私自身、子どもを「児童生徒」という学校の枠組みの中だけで「理解した」と思い込み、子どもがもっている豊かな個性、可能性を見落としてしまいそうになることがあります。そのようなときに、ふと子どもを多面的に見ることを思い出させてくれるのが、早期教育相談で子どもが見せてくれた表情です。

さて、進路指導と、訪問教育学級や早期教育相談での指導は、一見分野の異なるものに見えますが、学校とどこかの間に立って児童生徒の指導に当たるといふ点では同じです。学校と社会の間に立って見たときに、社会で生きる子どもたちの姿を想像して「児童生徒」としての子ども像を相対化することによって、子どもたちが自分らしく生きていく道が見えてくるといふことがあると思うのです。そのような意味では、進路指導は、単に学校から社会へのスムーズな移行を実現させるためだけのものではなく、子どもたちが、社会の中で己の個性や可能性を発揮しながら、自分らしく生きる道を見つけるための支援であり、それが我が子の幸せを心から望む保護者の願いを叶えるものだと思うのです。

県立南那須特別支援学校 小林 奈津美

よりよい児童・生徒指導のために

「児童・生徒指導」という言葉からは、トラブル対応というイメージが浮かぶかもしれませんが。確かに、子どもたちの抱える問題を解決し、安全・安心を保障するのは大切なことです。しかし、子どもたちの自己実現や社会的自立のためには、トラブル対応のような「課題解決的な指導」はもとより、「予防的な指導」や「成長を促す指導」にも力を注ぐことが大切です。

では、これらの指導の際にはどんなことを心掛ければよいのでしょうか。子どもたちの年齢や状況の違いによって心掛けるべきことは異なるでしょうが、本冊子の内容のように「みる」「きく」「寄り添う」「認める」が鍵になると思います。子どもたちの様子をよくみて、思いや考えをじっくりきき、その気持ちに寄り添い、一人一人を認める。そんなことは当たり前だと感じるかもしれませんが。しかし、「慣れ」や「思い込み」「焦り」などによって、その当たり前がおざなりになってしまうこともあるのではないのでしょうか。

教職員間で情報を共有したり、声を掛け合ったりすることで、子どもたち一人一人の様子や気持ちを把握して、よりよい指導の在り方をみんなで考えていきたいものですね。

関係資料のご案内



「児童生徒への適切な指導のために～一人一人を『認める』～」
 栃木県総合教育センター
 2019年3月



「児童生徒への適切な指導のために～子どもの理解を深める～」
 栃木県総合教育センター
 2020年3月



心と体の成長を目指して

置かれた場所で咲けるように

栄養士として働き始めてから三十五年余りが過ぎてしまいました。事業所の栄養士、病院の栄養士。そして現在、学校の栄養士として三十年以上勤務させていただいています。そんな経験の中で、自分自身が成長できたこと、栄養教諭として大切にしていることを少しだけ書かせていただきたいと思います。

学校現場は日々変化していきます。学校給食もO157の食中毒以降、衛生管理の日常点検や、作業指示書、作業動線図、検収表等、様々な帳簿の作成を行うようになりました。近年ではアレルギー対応が重要になり、アレルギー調査票、学校生活管理指導表（食物アレルギー用）、アレルギー対応同意書の提出など、保管管理が大きなウエイトを占めています。また、安全で美味しい給食の提供をするだけではなく、食育の重要性が見直され、担任と連携した食育授業の参画、食事マナーや郷土料理、行事食の提供を通じた食文化の指導等も求められるようになりました。

そして現在、コロナ禍の中で、児童、生徒、職員が安全に学校生活を送るために、全職員で協力しながら、様々な解決策を模索し、対応しているところです。

変化する日常に対応する中で、自分にはとてもできないと押しつぶされそうになることがたくさんあります。特に、学校栄養士は一人職種ということで責任が重く、孤立しがちだと思えます。けれども、子どもたちの「今日の給食美味しかったです」の声に元気をもらいながら、何とか今日まで勤めてこられたと感じています。子どもたちにはいつも元気をもらっています。そしていつも学ばせてもらっています。学校現場では、直接子ども

たちと触れ合うことで、給食に対する生の声を聞いたたり、残食の様子を見たりすることができ、献立や調理の問題点を見て取ることができず。問題点が見えたとき、気付かされることは、自分一人では解決できないということ。一生懸命に考えた献立であっても、調理員さん、先生方と連携できていなければ結果を出すことはできません。食育指導においても、担任の先生をはじめ、全職員、家庭、地域と連携できてこそ、よい結果が得られるのだと思います。

いろいろな子どもたちがいるように、いろいろな先生、栄養士がいます。自分自身が得意なこと、好きなこと、何よりも学校給食が大好きなことを大切に、日々の仕事に取り組んでいます。ここで、渡辺和子さんの『置かれた場所で咲きなさい』（幻冬舎）という本を紹介したいと思います。自分が置かれた場所で、どのように人々と関わっていくか、自分なりに推進していくことを考え、行動していくことの大切さに気付かされる一冊です。

食育は結果がすぐに出るものではありません。点数化できるものでもありません。将来を担う子どもたちが、心身共に健康で安全な生活を送るための資質・能力を備え、自ら考え行動できるたくましい大人になれるよう、皆と協力しながら食育を進めていかなければなりません。それぞれの「置かれた場所で咲けるように」、学校栄養士としてこれからも一生懸命に取り組んでいきたいと思えます。学校栄養士の皆さん、子どもたちのために、力を合わせて共に励んでいきましょう。

宇都宮市立岡本北小学校

澁谷 三千代

養護教諭として学んだこと

採用されてから三市町、現在の学校を含めて五つの小学校に勤務しました。全校児童八十人足らずの小規模校から、養護教諭が複数配置される千人を超える大規模校での勤務など、様々な経験をさせていただきました。

小規模校では、保健室への来室者は少なく、誰も来ない日もありました。そのため、昼休みや業間活動で子どもたちと触れ合う機会を多くとりました。業間活動で保健教育も行いました。保健教育では、ついあれもこれも伝えたいと内容を詰め込んで、話し過ぎてしまいがちですが、十五分間という限られた時間の中で子どもたちに理解してもらえよう、伝えるポイントを厳選したり、視覚的な教材や子ども自身が体験できる教材づくりを行ったりするきっかけとなりました。

大規模校では、教室に行くのをしぶる子どもを朝から何人も受け入れると同時に、代わる代わる来室する子どもたちに対応し、常に保健室には誰かがいる状態でした。来室する児童が百人を超える日もあり、休み時間になると手当てを待つ子どもの列ができるほどでしたが、受傷部位をよく観察するだけでなく、けがの発生状況をよく確認すること、軽微なけがでもその後の経過を確認することを常に心掛けました。迅速かつ適切な判断や処置をする上での心得や、緊急時に職員間で連携して対応するための体制づくりの重要性を再確認しました。地域や学校規模などの違いにより、学校で求められる保健室の機能が違い、保健室の経営の在り方について学ぶことができました。

そして、子どもたちからも多くのことを学びました。保健室には様々な理由で子どもた

ちがやってきます。四年生のAさんもその一人でした。Aさんは、人の目を気にするあまり、自分の思いをうまく表現できず、集団不適応を起こしていました。私はまず、保健室が安心できる場所だと思ってもらえるよう、私自身のことを話し、知ってもらえるよう努めました。そして「Aさんの声をよく聴くこと・本人の思いを尊重すること」に徹して毎日過ごしていました。そんなある日、大きな体を丸めてポロポロと涙を流しながら、今の自分の正直な気持ちを少しずつ、ゆつくりと話し始めたのです。ずっと思いを言葉にしたかったのでしょうか。その後、Aさんは、学年が変わった時に教室に戻ることができ、保健室に来ることもなくなり、無事に小学校を卒業していききました。何年か経ち、高校に入学したAさんから葉書が届きました。制服姿の凜々しいAさんが映った葉書には、「保健室では大変お世話になりました」という一文が書かれていました。当時は、自分の対応が正しいのか、もう少しほかにできることがあったのではないかと日々思い悩んでいましたが、Aさんのその言葉がうれしく、救われた気持ちになりました。

保健室にやってくるたくさんの子どもたちを見てきましたが、子ども自身に「変わりたい」という思いがあり、その思いを糧に、前を向いて一歩ずつ進む力があると思います。例えば、Aさんは、その力を蓄えるために、保健室で過ごした日々が必要な時間だったのだと思います。自分の居場所がある安心感、誰かに大切に思われている実感を与えることが養護教諭として大切だと学んだ経験の一つです。

それぞれの学校での経験や子どもたちとのふれあいの中で、多くを学び、成長することができました。これからも一日一日を大切にしていきたいです。

小山市立大谷北小学校

小堤 正子

初心勿忘

「自分の健康は自分で守る」という視点で健康教育を進めることができる仕事として、私はこの職業を選びました。今までの経験の中で、それぞれの発達段階での課題や、家庭の影響力を考えると、「幼いころに身に付けた健康に関する知識・技能などの生活習慣は、児童生徒の健康なからだや生涯に渡る健康的な生活と結び付いている」と実感しています。もちろん、養護教諭は児童生徒のみならず、その子を取り巻く環境にも影響を与える職業とも言えます。例えば、子育てをしている保護者にとつて「何人の子育てを経験しても同じ対応ではうまくいかない」と感じていることを踏まえ、それぞれの子どもの個性に応じた対応ができるように保護者を支援することで、親子が心身共に健康に過ごせることにつながるでしょう。また、親または子の健康に不安があると、困難に立ち向かう力が十分に発揮できないかもしれません。これらは教員にも同じことが言えます。日々の生活に追われていると、「健康であることが大切だ」ということに気付かず、自分や自分の身近な人が病気になったときに、初めて「健康のありがたさ」を痛感するようです。

私は、家庭と協力して行う健康教育として大切なのは、児童生徒の「自立」を促すため、低学年のうちには様々な体験をさせ、「自分のことは自分でできる」「やればできる」という自信を付けさせることだと考えています。このような小さなステップで自己肯定感を高めておくことが、自分を大切にできる初めの一歩ではないかと考えます。次に、「自律」を促す教育へ移行していくのが、小学校高学年から中学校にかけての時期です。この時期にどれだけ大人が「丁寧に関われたか」が大切になっているようです。その関わりは、大

人が直接手を掛けていた「自立」時とは違い、「極力手は出さず、口で説明し、見守る」こと。すなわち一人一人に寄り添い「褒めて伸ばす」ことができれば、その子は健康という「一生の宝」を手にすることができると考えています。

学校における健康教育で、私は身体的、精神的、社会的に困難なことにぶつかった時にどう対処し行動できるか、その子と一緒に考えることを大切にしています。例えば、困難な壁に直面した時こそ、自身や周りを振り返り「心身の健康」について一緒に考え、改善のために自分に厳しく向き合えるように寄り添ったコーチングをしていくことも私の役目と考えています。また、ストレス社会といわれる現在、未来を担う子どもたちにも、できるだけ多くの具体的かつ実践的なアドバイスができるかが必要不可欠です。それには、ハウツーではない問題解決の手立てや人との関わりを通して、「自分の健康は自分で守る」ことのできる人を育てることこそ、学校で行う健康教育の一つだと思っております。

学校という環境に身を置く者として、時には毅然とした態度で対応したり、示唆したり、目の前の児童生徒、またはその子を取り巻く環境を改善すべく苦慮したりすることもありました。そして私自身も生身の人間です。常に一人では完璧なことができないはずもなく、周りのたくさんの人たちに様々な場面で助けられ、健康的に楽しく仕事ができること、私には感謝しています。今後も焦らず、時には基本を振り返りながら、残りの教員生活を送りたいと思うこの頃です。

最後に、医療も教育も日進月歩で変化の激しい時代ですが、皆さんもどうか初心を忘れることなく、児童生徒への丁寧な対応を心掛けてください。

宇都宮市立一条中学校

佐藤 真由美

子どもたちの健康づくりの一助となるように

「皆さんのからだは、皆さんが毎日食べているもので作られています」「将来なりたいもの、これからがんばってやってみたいことを実現するために、がんばることのできる元気なからだを作る。未来の自分のために、毎日の食事を栄養のバランスを考えてしっかり食べたいですね」これらは、食育の話や授業をした後に、私が子どもたちに伝えている言葉です。

私は子どものころ、給食の時間が苦手でした。食が細かったこともありましたが、苦手な食べ物が多くて、それらがたくさん入った献立の日は辛かったことを覚えています。その後、現在のように学校給食に関わるようになった私が思ったことは、苦手な食べ物も、進んで食べられるような給食づくりを心掛けるということです。

まず始めに行ったことは、日々の給食の時間に、子どもたちの様子を見ることです。苦手とする食材や料理のある子どもたちには、食べられないことや食べたくないと思う理由がありました。あるとき、小学一年生と会話している中で、苦手ナンバーワンのピーマンは「にがいから」、また、しいたけは「(食べた時の)食感が嫌」、「千切りにしたものは見た目がナメクジに似ているから」という答えが返ってきました。私の最初の取組は、これらのことを解決するために調理の方法を工夫することでした。千切りにして使うことのも多いしいたけは、放射線状に切り三角形にしたり、色紙切りにして四角にしたりしました。また、苦みのある食材は、その苦みを抑えるための調理を模索し、工夫しました。

次に、こうして作った給食を毎日食べる子どもたちに、給食室での工夫や、その食材の

持つ栄養素について話すことにしました。そうすると、少しずつですが給食の時間に変化がみられるようになりました。毎日少しずつの積み重ねが結果につながる。味覚も苦手としていた味を味わうことで成長していき、結果として好き嫌いがなくなっていく。こうして苦手を克服して栄養のバランスよく食べることが出来るようになることで、からだだけでなく、心も成長をしていくことを子どもたちと一緒に学んできました。

私たちの職種は、校内に一人配置のため、仕事を進めていると孤独や不安・負担を感じることも多くあります。給食での対応は急を要することも多く、経験が浅い方にとっては、判断が難しい場面も多いと思います。困ったときは、近隣の先輩栄養教諭に連絡・相談して解決していくことをお勧めします。一人で悩まず経験のある先輩たちに一緒に考えてもらうことは自らの成長にとって必要なものです。今まで私がこの仕事を続けてくることのできたのは、指導してくださった先輩方、助けてくれた同僚や、一緒に給食づくりに関わってくれた調理員さんたちがいたからです。時に私を励ましたり、叱咤したりしながら、一緒に考え協力してくれました。

健康なからだは、食事・運動・生活習慣をバランスよく整えていくことで作られます。そして、様々な先生方と協力して行うことで健康教育は広がり、深まります。これから未来へ向かって進んでいく子どもたちが、「将来になりたい」と思っていることや、勉強やスポーツなどで「今がんばりたい」と思っていることを実行していくには、日々健康であることがとても大切です。その健康を支える一助となるように、私は、栄養教諭としてこれから健康教育に関わっていきたいと思います。一緒にがんばりましょう。

壬生町立壬生中学校 吉葉 裕子

養護教諭として

私はこれまで、小学校三校、中学校三校を経験させていただきました。その間、たくさんの児童生徒や先生方と出会い、「学校」というかけがえのない場所を過ごしてきました。そんな私の毎朝の日課は、学校に向かう車の中で好きな音楽を聴きながら、「今日も皆が健康に過ごせますように。よし、頑張ろう」と気持ちを注入することです。もちろん、実際には様々な出来事がありますが、「養護教諭」としてのスイッチを入れる出勤時のルーティンのようなものです。

経験が浅くても、けがや病気の対応をする「保健室の先生」は一人です。少しでも自分に自信がもてるよう、知識と実践力を身に付けようと、初任の頃は、土日や夏休みに開催される研修会に積極的に参加していました。しかし、当時は、もっと早く病院を受診させればよかった、保護者への対応がうまくいかなかった、検診の段取りがよくなかった等、失敗も多く、心が折れそうになることがたくさんありました。何でも一人で対応しなければという気負いがあったように思います。そんな時、勤務していた学校の校長が「竹のよるに『しなやかに』『折れない心』をもって頑張つて」と励ましてくださいました。その言葉を道標とし、現在の自分がいるように感じていきます。「こんな養護教諭になりたい。こんな保健室にしたい」と思う気持ちが強すぎて、周りとの調和がとれないとうまくいきません。健康診断等の学校行事や保健教育、応急処置、子どもたちとの関わり等、何を行うにしても同僚の先生方の協力や御指導がなければ円滑に進みません。自分のポリシーを大切にしながらも、組織の一員として健康教育、保健室経営を進めるよう心掛けています。

小学校六年間、中学校三年間は、心身共に大きく成長する時期です。成長過程の中で心が揺らぎ不安定になる生徒の対応も、保健室の重要な役割の一つです。過去にこんな事例がありました。いらいらした様子で保健室に入ってきた生徒がいました。言葉遣いや態度が悪く、「何かあったな」と感じましたが、保健室の使い方を守ってもらいたいと思い、まず指導しました。すると、「二度と来るか」と出て行ってしまいました。担任から事情を聞いたところ、進路先が定まらず、親と口論になり、気持ちが落ち着かないまま学校に登校したとのことでした。その時、担任が「保健室は、どちらかという『受け身』(の役割がある)でしょう。二度と来ないと言った生徒は本当に二度と来ないかもしれないよ。声を掛けてあげてほしい」と、帰りに生徒を連れてきてくれました。私は、その生徒に、「担任の先生から事情は聞きました。さっきは話を聞いてあげられず、ごめんね」と伝えようと、こわばっていた生徒の顔が緩んでいくのが分かりました。そして、保健室は、みんなが安心して使える場所になりたいと思っているから指導したことを伝えると、生徒は謝罪し、その後は、気持ちが不安定な時でも、「失礼します」と言って入室するようになりました。担任のフォローがなければ、その生徒との関係が途切れていたかもしれませんでした。それ以降、保健室で関わった生徒や気になる生徒には、「声掛けチャンス」を見付けて、声を掛けるように心掛けています。「その後どう？」と声を掛けると、生徒は「気に掛けてくれていい」と感じます。そんな毎日の繰り返しですが、生徒との信頼関係を築く大切な時間となります。目の前にいる子どもたちが、生涯健康に生活できるように、養護教諭として、また、チーム学校の一人として、何ができるかを考え、成長していきたいと思えます。

小山市立小山城南中学校 橋本 牧子

不器用だからこそ

この度の原稿依頼をいただき、過去を振り返ると「なんでお前がここにいるんだよ」と生徒に生意気なことを言われても何も返せなかった新人時代を思い出した。とにかく何もできなかった。言うべきことを言えなかったこと、逆に余計な一言を言ってしまったこと、配慮が足りなかったこと、失敗ばかりで今思い出しても自分の不器用さに嫌気がさす。

高校に勤めていたときのこと。普段保健室に來ない生徒が、「先週こういうことがあって：」と大きな問題を教えてくれたことがあった。よく話してくれたねと伝えると、友人から保健室の先生に相談するように勧められたとのことだった。養護教諭に言えば何でも解決できるわけではない。だが、子どもたちはよりどころとして求めてくることがある。しかし私には経験も浅く、話を聞くだけでどのように声を掛けてよいかも分からなかった。かつ問題を抱えた生徒は一人ではない。何もできず堂々巡り。生徒と一緒に落ち込む日々もあった。何もできない自分から少しでも脱却したかったことや、丸山隆先生からの勧めもあり、栃木県カウンセリング協会主催のカウンセリング研修を三年間受けることにした。研修を振り返り、よかったことを三つご紹介したい。一つ目は、話している人の「知・情・意」を考えるトレーニンングをしたこと。「知」：何を考えているのか、「情」：どう感じているのか、「意」：どうしたいと思っているのか、ということだ。言葉の奥にある知・情・意をくみ取って相手に確認する演習だったが、相当な意識を傾ける必要がある。何度も間違い、先生に指摘され、受講生みんなで頭を抱えた。何度も繰り返し、わずかに感じ取れた瞬間があるとうれしくなった。二つ目は、相手を評価する言葉について考えた

こと。例えば「私なかなか友達ができないんです」という相談に対して「そうなんです、あなたは人と話すのが苦手なんです」という返しだ。まだ人と話すのが苦手だと本人は話してはおらず、カウンセラー側が勝手にそう思い込んで評価してしまっているのである。本人は、別の理由が心の中にあるかもしれないし、傷ついてしまいかもしれない。自分の価値観で話したり善悪で物を言ったりすると、相手はそれ以上何も話したくなくなるだろう。言葉掛け一つの大切さ、それで信頼関係を作っていくこと、また話をしながら自分の態度や言葉はどうか、自らを俯瞰して見る必要があることを知った。三つ目は仲間ができたこと。その研修では同世代から六十代まで、教員、医療従事者、主婦の方など様々な立場の方と一緒に受講した。講師の先生と意見交換したり、キャリアを積んでいても演習でうまくいかず涙したり、先輩方の学ぶ姿を見て、いくつになっても学びたいと思えば成長につながるのだと刺激を受けた。そのような素敵な先輩方と出会うことができてうれしく思う。仲間ができたからこそ三年間通うことができた。

研修で学んだことが実践できているか、自信はない。しかし、少しずつ自らを俯瞰して見られるようになり、自分が苦手なこと、まだやっただけなこと、知らないことがたくさんあることが分かってきた。不器用は治らないと思うので、できることを少しでも増やしていくためには継続的な学びが必要だと思う。このような私がこれまで仕事を続けることができたのは、手取り足取り教えてくださった先輩方をはじめ、温かいご配慮と、少しでも成長するようにとたくさん支援してくださった多くの先生方のおかげである。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

県立豊学校

岩崎 美絵

健やかな体を保つ

小学校6年生4.8%、中学校3年生6.3%、これは何の数値だと思いますか？ この数値は、全国学力学習状況調査（令和3年度）の質問紙において、朝食を「あまり食べていない」「全く食べていない」と答えた本県の児童生徒の割合です。35人学級のうち約2人が、朝食を食べていないということになります。また、体力・運動能力調査（令和3年度）の体力合計点の平均値を見てみると、本県は全国平均値を下回る結果が出ています。運動時間の減少や、運動する子としない子の二極化等が懸念されます。

子どもを取り巻く健康上の課題は、運動時間の減少、食生活を含めた生活習慣の乱れ、心の健康問題、アレルギー疾患や感染症の問題など、多岐にわたる要因が複雑に絡み合っており起きています。だからこそ教育の分野における健康教育・食育は、健やかな体を育てていく上で、大切な役割を担っています。

本冊子の内容からも養護教諭、学校栄養士等が専門性を生かしながら、外部機関も含めたチーム学校として、健康教育・食育の充実を図れるよう、様々な取組を展開していることが分かります。教職員全体で指導の目標を共有し、子どもたち一人一人が、心身の健康に関心を持ち、自分の健康上の課題を理解した上で、生涯にわたり健やかな体を保つことができるように、日々働き掛けていくことが大切です。

関係資料のご案内



「学校給食レシピ集
（総集編）」
栃木県教育委員会
2018年2月



「『生きる力』を育む
中学校保健教育の手引」
文部科学省
2020年3月



充実した集団活動を目指して

いいことづくし学級会

教員生活半ば、個人研究として学級活動（1）の「学級会」に力を入れるようになり、前任の鹿沼市立北押原小学校においては、特別活動の研究指定校となり、「学級会」の実践研究を中心となって進めてきた。

特別活動における主体的・対話的で深い学びの実現を図る上で、学級会は、まさに「いいことづくし」であることが、研究を重ねるうちに身をもって実感できた。計画委員として司会や黒板記録を誰もが経験できる素晴らしさ。「自分もよく、みんなもよいように」決めていく合意形成のすべを学ばせることができる素晴らしさ。決まったことをみんなで実践することで、児童同士のよりよい人間関係が構築できる素晴らしさ。さらに、自分の意見には必ず根拠をもち、それを明確に伝える力が付いてきて、教科の学習にも生かされてくる。出された意見を分類し、みんなが思考しやすいように整理する力が付いてくる。

「Aさんは、だから反対なんだ」「Aさんの考えはこっちに近いかな」と友達の思いを聞き取ったり聞き分けたりする力も自ずと付いてくる。学級会が学力形成の基盤となつていくことを実感した。「Bさんの考えもよいと思うのですが、〇〇の心配があるので、今回はやらなくてもよいと思うのですがどうですか」と相手を傷付けない言い方も学べる学級会は、人権教育そのものである。学級会のいいことを挙げるときりがなくない。

私が実践した中で、心に残っている学級会がある。「集会でやること」が二つ決まったのだが、どうしても合意できない子がいた。さあどうする、助言が必要か…と考えていた時、さっと手を挙げた児童がいた。「じゃあ、Cさんがやりたいのも少しやって、決まっ

た〇〇も少しやって、△△も少しやるのはどうですか」と、みんなもその子も、それならよいと言える考えをひねり出したのである。みんなでもよりよく生活していく方法を考えていく、そんな思考力が身に付いてくることを感じた学級会だった。そして、その年の三月には、「もうすぐ四年生だね春パーティをしよう」が提案されたり、一年間の学級会の議題をすべて書き込んだ思い出カードを自ら作ってみんなに配る子がいたり、学級会の実践が学級生活の充実につながっていったのを感じた学年末となった。

学級会を通して、豊かな学級生活を自分たちでつくる経験を積むと、児童会活動やクラブ活動での話し合いも上手にできるようになった。私が担当していたバドミントンクラブでは、「今日は二対二で試合をします。どんなルールにしますか」とクラブ長の司会で話し合いが始まると、「十点マツチがいいと思います。五点だとすぐ終わっちゃうからです」といった発言が出るなど、学級会での経験を生かした話し合いができた。児童会代表委員会で運動会の話し合いでは、テントに全校生が描いた競技のイラストを飾り付けるというアイデアが出た。保健委員会では、全体練習の前にじょうろで校庭に水まきをする打ち水作戦はどうか、という面白い意見が出た。また、通常の委員会活動では、ペットボトルのキャップを集めていた環境委員会が、集まったキャップの数当てクイズを企画し実践した。翌年はさらに進化し、キャップでリサイクルおもちゃを作ろうという意見が出て、一年間かけて地道に製作した。飼育委員会発案のうさぎのえさやり体験もみんなを楽しませた。

自分たちで話し合っって楽しい学校生活をつくるアイデアの原動力は、「学級会の経験」にほかならない。

鹿沼市立菊沢東小学校

大久保 幸江

六年生を成長させる縦割り班活動

私がこれまで勤務してきた学校では、活動内容に違いはあるものの縦割り班活動が行われていました。そして、縦割り班活動が特別活動の基軸となっていました。

私が二校目に勤務したY小学校（当時の児童数約七百八十人）では、体育主任や特別活動主任と共に、運動会での縦割り班の運用について、先生方と議論を重ねた思い出があります。それまでの運動会は、紅白対抗で行われていました。子どもたちにとって思い出深い行事の一つではあったのですが、「子どもたちの活躍できる場を、もっと増やしたい」「運動会にもっと主体的に取り組ませたい」という思いから、縦割り班を基に全校を四グループ（四色・赤青黄緑）に分けました。必然的に応援団員や選抜リレー選手は、色ごとに存在することになり、活躍できる子どもが増えました。また、運動会にはスローガンがつきものですが、全校のスローガンに加え四色それぞれのスローガンを子どもたちに考えてもらいました。合わせて、各色のキャラクターのアイデアを募集し、子どもたちが決めていきました。その後、応援団員を中心に決起集会を開き、結束が高まりました。そして種目に縦割り班対抗種目を設けたり、当日の応援席を色ごと・縦割り班ごとにまとめたりすることで、色ごとの一体感が生まれました。これらの取組により、子どもたちの運動会への意欲をこれまで以上に高めることができ、運動会は大いに盛り上がりました。運動会のほかにも、常時活動としての縦割り班共遊や、児童会活動としての「縦割り班ウォークラリー」などが行われており、これらの活動を通して子どもたちの成長が認められました。三校目のT小学校（当時の児童数約二百人）では、体育主任としてY小学校での経験を

生かし、縦割り班を基にした運動会へと変更しました。児童数が少なかつたため四色対抗とまではいきませんでした。縦割り班を随所に活用することで期待していた効果が得られました。T小学校で特色のある活動に、「大小山縦割り登山」があります。学区内にある大小山（標高二八二m）に縦割り班ごとに、ウォークラリー形式で登山するという児童会行事の一つです。登山では、高学年が低学年のペースに合わせたり、荷物を持ってあげたり、手を引いたりという姿がよく自然に現れ、縦割り班の絆が深まる行事でした。

現在の勤務校である東山小学校にも縦割り班活動が存在します。児童会行事「スマイルマーケット」は、縦割り班ごとに体験型のブースを企画し、それらの運営や体験を通して縦割り班の絆を深めることができます。

以上のような縦割り班を基軸とした様々な活動を通して、特に六年生児童の成長が感じられました。私自身、高学年、特に六学年を担当する機会に恵まれてきました。縦割り班活動に際して、六年生児童一人一人が縦割り班のリーダーとしての自覚と自信をもって行動できるように、不安を徹底的に取り払ってから活動に臨ませてきました。活動中は特に六年生児童に対して、下学年児童に聞こえるように称賛の言葉掛けをするように努めてきました。こうすることで、六年生児童が自分に自信をもつことに加え、下学年児童が六年生児童への信頼度を高めることを期待してきました。

今のコロナ禍において、縦割り班活動に様々な制限がかかり、これまでの活動ができない状況にあります。それでも可能な限り実施していくことで、子どもたちの成長する機会を、特に六年生児童の成長する機会を確保していきたいと考えています。

足利市立東山小学校

永島 厚洋

特別活動で生徒も成長、私も成長

「生徒会活動やってみない？」私が特別活動の世界に足を踏み入れ、魅入られることになったきっかけは、新採のときの先輩教員の一言だった。さらに他の同僚に言われた一言、「特別活動で学んだことは学級経営に生かせる」の言葉に、やってみたい以外の選択肢はなくなった。

その後、特活主任、教科指導員などの立場になり、特別活動（特に学級活動）について学べば学ぶほど、奥が深いものであると知った。また、教科等の中でも特に、生徒や学級、学年の大きな成長が期待できる時間であると感じた。実際に多くの場面でそのことを痛感した。

担任になった最初の頃は、「今度の学活、何やろう」と毎週悩んでいた。学活の年間計画はあるが、学級や生徒の実情に応じて、今必要である内容を取り上げることが効果的であるからだ。どうしようかと悩んでいたある日、生活ノートのコメントを見て、「そうか、学級のことは、生徒と共に考えていけばいいんだ」と気付いた。そこからは、毎週の学活の内容を考えることが楽しみになった。それまで以上に、生徒の普段の様子、表情、言葉を気に掛けるようになった。もちろん、生徒の目から見た学級、担任の目から見た学級、そして、他の教員の目から見た学級、それぞれの意見を参考に考えていくことが大切である。だから、生徒だけでなく他の教員との会話も大切にした。そうすると、学活でやりた

いことが増え、週一回では足りないと感じるぐらいになった。

学級の課題は、生徒が発見もしくは生徒が発見できるように担任がサポートする。そし

て、生徒が自分の気持ちと葛藤しながら、それぞれが折り合いをつけ、学級としてどうするか決定していく。この経験や学びの繰り返しは実生活につながり、生徒の行動の大きな変化につながる。また、個々の課題は、担任が生徒の実態に応じて課題を設定し、その課題を自分で考え一人一人が意思決定し、行動決定していく。自分自身を見つめ、今後どうするかを考え、行動に移すことは自己の成長には欠かせない。そして、学級や自己の課題と真剣に向き合った一人一人の生徒の成長の積み重ねが、学級の成長へとつながるのだ。

さらに、特別活動で生徒が大きく成長する機会として欠かせないのは学校行事である。特に学級ごとに取り組む行事では、つい生徒以上に熱が入ってしまう。でもそれは、勝ちたい気持ちや上手くやらせたい気持ちからではなく、生徒に味わわせたい気持ちがあるからだ。そのため学級で行事ごとに目標や合言葉を決め、その達成に向けて妥協せずに取り組んだ。行事ごとに目標や合言葉を決めるのは、生徒が行き詰まったときに戻る場所をつくるためだ。トラブルこそ成長のチャンス。行事に向けて順調に進んでいるときには、意図的に一人では解決が困難な課題を与えた。生徒同士で考え、乗り越えるからこそ、強い結束力や意志が生まれる。相手を想う優しさや気遣いが生まれる。それが、学級の成長につながる。ついつい手を差し伸べたくなることもあるが、ぐっと我慢して生徒の力を信じて待った。いつも、私が思っていた以上のことを成し遂げ、毎回泣かされた。そんな生徒たちに、行事が終わると賞に入っても入らなくても、担任の目から見て成長できたことに對しての賞をあげた。ベストチーム賞、ハートフル賞、結証（ゆうしよう）などなど。

とにか、特別活動は奥が深い。今は学年主任。学年の成長のためにまだまだ勉強。

宇都宮市立豊郷中学校 松本 清美

部活動指導から得られるもの

私は現在、四校目の学校に勤務している。初任の小学校で野球部の顧問になったところから、私の部活動指導は始まった。二校目ではサッカー部とバレーボール部の顧問になり、その後異動した中学校ではサッカー部とソフトテニス部の顧問となった。現在勤務している市貝町立市貝中学校でも、ソフトテニス部の顧問をしている。

最近、部活動指導を避ける先生が増えてきているということをよく耳にするようになった。部活動に関して、まず頭に浮かぶのは、休日が少ないということではないだろうか。それはそのとおりだと思う。何年前かは、土日両方練習試合や遠征に行くことや、年末も大会があることなどが多かった。遠征や練習試合の場所が年々遠くなっていき、私の車の走行距離は二十五万kmという数字になってしまった。そして何より、家族には大いに迷惑を掛けたことも分かっている。私の妻も部活動指導に関わっているので、理解はしてくれていたのだが、そうではない場合も多いと聞いている。次に、自分がやってきた種目ではない顧問になってしまったらどうしようということである。私も野球、バレーボールに関して経験がなかった。野球部のときは、「雨が降ればいいのに」、バレーボールのときは、「体育館が急に使用できなくなれば」などと変なことを考えたこともあった。

では、そんな思いまでして部活動指導をする意味とは何なのであろうか。私は、その問いに関しては、「よりよい人間関係の構築」ということを一番に挙げたい。まずは児童生徒との人間関係。子どもたちは、部活動では教室と違う顔を見せてくれる。熱心に練習に取り組んでいる子、進んでボール拾いをしている子、挨拶を大きい声でする

子など、様々な顔を見せてくれる。子どもたちのそういう場面を見られることは、教員冥利に尽きると私は思う。また、生徒指導など、教室より部活動の方が指導しやすい場面もあり、児童生徒との信頼関係も築きやすいのではないかと思う。生徒を思い出すとき、すぐ思い出すのは部活動の生徒であることが多い。また、今でも、高校生や大学生、社会人になった教え子がテニスコートに訪ねてきてくれるのが私の誇りでもある。

そして保護者との関係。最近の保護者は部活動によく顔を出す。そこで顧問がどう振舞っているかを実によく見ている。ただ、教員が一生懸命やっていたら、それに対して不満を言う保護者は少ないだろう。そこに勝敗はあまり関係ない。教員が全力で取り組めば、保護者も全力で支えてくれる。私も成績面だけでいえば、よかった年も、そうではなかった年もあるが、今まで多くの保護者に協力してもらい、助けてもらった。

最後に他の先生方との関係。様々な先生方とのつながりができ、そのつながりにたくさん助けられた。他県にも多くの知り合いの先生がで、連絡を取り合っている。また、バレーボール部顧問になったときには、当時小学校のバレーボールの県優勝監督だった先生に連絡をとって、練習会をしていただいた。そして、その十年後、その先生のお子さんを指導し、ソフトテニスの県大会で優勝することができた。人と人とのつながりは本当に不思議なものである。

現在の世の中が前と違うのは分かっている。しかし、部活動指導を通して得られるものは教員としても大きなことであることは変わらないと思う。

市貝町立市貝中学校 涌井 俊裕

先輩教師等から学ぶ部活動指導

初めて駅伝部を担当した当時、何をどう指導すればよいのか全く分からなかった。本やDVDを買って自分なりに勉強したが、どうもしつくりこなかった。「日本一を目指す」「世界で通用する走り」などの内容ばかりが目についたが、私が求める情報は見当たらなかった。私の悩みは、駅伝部から離脱したがる生徒をいかにして減らすかだったからである。「野球の方に専念したいので」や「勉強の時間がなくなるので」と言って特設の駅伝部から離れる生徒たちに、どうすれば駅伝へ気持ちを持ってもらえるのか。当時の私にとって、トップアスリート育成の教則本等の情報は、何の役にも立たなかったのだ。

私が「心から学びを得た」と言えるのは、現場で日々様々な課題を抱えながら奮闘されている先輩教師からの助言であった。しかし、聞こえてくる課題は「故障者が多くて」「など、私のチームに対する悩みとまるで違っていた。その先輩の率いる生徒たちは、結果を残そうと練習に励むあまり、故障するほど頑張り過ぎてしまうのである。生徒が練習に夢中になるような指導をしているという事実に感心すると同時に、「自分の指導は、練習への意欲さえ、もたせられない」という、自分への怒りや無力感を覚えた。しかし、そんな状況の私にまでも、先輩教師の方々は心を寄せて御助言くださった。私にとって欠かせない存在であり、これらの助言は、間違いなく私の財産となっている。

それからというもの、私は「この指導者の話をぜひ聞きたい」と思えば、できる限り足を運ぶよう努めた。県内はもちろん、東北から近畿、中国、四国地方まで。指導者の方は、私の知りたいこと、困っていることに的確なアドバイスをくださった。そのときに頂いた

資料や、聞き取ったメモは、私にとって最高の知的財産だ。やがて、これまで出会った尊敬する先輩教師や指導者には、幾つかの共通点を感じるようになった。①「こうすれば勝てる」「だからダメなんだ」と短絡的に法則化せず指導の多様性を肯定的に捉えている。②失敗を生徒のせいにしていない。③言い訳、愚痴がなく、自己正当化もしない。④謙譲の美德を備えている。⑤さも分かっているかのような口ぶり、評論家の如きもの言いがない。⑥発する言葉の一つ一つに重みがある、などのことが挙げられる。

⑥に関して、我々教師が生徒に対して発する言葉には、生徒の成長につなげる明確な意図があるべきだし、発した言葉には責任をもつべきだと考えている。部活動に限ったことではなく、授業でも学年集会でも、何を話すべきか、話さざるべきかを考え抜いたうえで話すことが大切であると思う。

駅伝は、レースがスタートすると、選手が一人で勝負しなければならぬ。ともに汗を流してきたチームの仲間が傍にいない。これがトラックレースとの大きな違いなのだろう。だからこそ、本番は一人一人が的確に状況を判断して走る必要がある。そのために、あらゆる状況を想定させる。「気温が高くて」「風が強くて」など、失敗したときほど言い訳をしたくなるものだが、これではライバルに勝てるはずがない。私が常々生徒に伝えていた言葉の一つが「精強・即応」である。どれほど不利な状況下であっても戦い抜く強靱な精神力、いかなる状況の変化にも即対応する力を身に付けるべきと伝えてきた。

これからも、「教師にとって最大の『武器』は言葉である」との先輩からの教えどおり、生徒に伝えるべき最良の言葉を吟味し続けたい。

大田原市立野崎中学校

高橋 尚孝

自分を生きる

保育園時代から集団生活が好きではなかった。学校生活はいつも何となく違和感があった。何となくもがきながら過ごした学校生活の中で、どうして学校に行くのか、学校は何を学ぶところなのか、そんなことを考えるようになっていた。学校に行かなければならないというのであれば、自分が教員になって、どんな生徒でも学ぶ楽しさに気付き、自分らしさを発揮できるように共に過ごしたいと考えるようになった。

初任校は、自分の可能性を信じていることができない（頑張ることができない）生徒が多い学校だった。そこでは生徒と共にたくさんの「特別活動」に取り組んだ。「特別活動」には成し遂げられないことにあえて取り組み、合宿なども何度も行った。生徒会でも生徒自身が行事を動かすよう、合宿を行い、多くの時間を共に過ごした。部活動もしかり。その中で生徒たちは「自分たちでもできる」「集団の中に自分なりの役割が必ずある」「一杯やると充実感があり、本当に楽しい」と実感し、普段の学校生活の中でも表情や行動が変わっていった。それは特別活動だけにとどまらず、学習をはじめ、様々な活動に前向きな姿として見られるようになった。同僚の先生方とも、たくさんのことを話した。学校を、生徒をどうしていくか、多くのことを共に考えた。初任校でのこの経験が私の土台になっていくように思う。

二校目は、前向きで素直な、でも自分から行動することが苦手な、自分の進路を自分で決められない生徒が多くいる学校だった。なぜ勉強するのかという問いに自分で答えを見

付け出せるようになってほしいといつも考えていた。そして、その答えも「特別活動」の中にあると考えていた。何か行動を起こそうとしたとき、もつと上のレベルに行こうと考えたとき、必要となるのが「知識」や「協働する力」や「表現力」や「課題発見・解決力」であり、それはまさに「課題研究」で身に付くものだと考えるようになった。学校内での学びと自分の行動には深いつながりがあると生徒自身が気付く活動をいつも目指していた。そこで、学校内外関係なく生徒が活動する場面を多く設定するようになっていった。また、生徒が将来を考えるときに「社会」という視点が欠けていると強く感じていた。身近な集団を含む「社会」の中の自分、「社会」の現状を考えて初めて自分の将来が見えるとも考えるようになった。教育課程の中に課題研究としての「ゆずも学」を入れ、地域連携に力を入れたのもそのような考えが土台にあったからである。その中で生徒だけでなく、教員も一緒に「課題研究」や「学ぶ」とは何かということを考えてきたように思う。

長く過ごした二校目から昨年度異動し、現在の三校目では、私はまだ自分にできることが見付けられずにいる。教員生活はまさに「課題研究」の毎日だ。でも、きっと生徒と過ごす毎日の中で「課題」は自然に見付かってくるのだと思っている。

誰もが心から安心して、自分らしく生きていける「成熟した社会」にしたいと願う。目指す人間像に「正解」はない。同じものを目指さなくていい。皆がそれぞれの持ち味で集団の中で役割を担う。大人になるに当たって必要な力は高校の三年間、どのように過ごすかにかかっている。自分だけの何かを見付けてほしい。そう願って、私も自分にしかできない「何か」を見付けられるべく生徒の前に立つ。

県立宇都宮高等学校

田村 絵美

ものづくりの楽しさを伝えるために

工業系の高校には、機械や電気など、いろいろな分野のものづくりを学ぶことができる部活動があります。生徒たちにとっては、授業や実習で学んだ知識や技術が、実際のものづくりにどのように応用されているのかを学習できる、貴重な部活動です。

その中で、私が初任から現在まで指導を継続しているのは「ロボット製作」です。最初は、専門ではないのでどこまでできるのか不安でしたが、自分でロボット製作を学んでいくうちに、その楽しさと難しさを感じるようになりました。

高校生にとっては簡単ではないロボット製作を、部活動で行うメリットはいくつか考えられますが、私が大事にしていることは、

- ①ものづくりのプロセスを一から学ぶことができる。
- ②作品を製作し、大会に出場することで、ものづくりの達成感や充実感を味わえる。
- ③自分の所属している学科の知識以外の技術も学ぶことができる。

①については、ロボット製作のプロセスとして、まずどんなロボットを製作するのかを目的に応じて考えることが重要です。そのイメージを元に図面を作成してから取り組まないと、目的どおりに動作するロボットを製作することはできません。また、製作後は動作を確認しながら、不具合があれば改善していくという作業を繰り返しなければなりません。これは、企業が商品企画から製品化まで行う工程とほぼ同じ内容です。高校生の段階でこのものづくりのプロセスを学んでおけば、就職してからも絶対に役に立つと思います。

②については、ロボット製作の目的意識を高めるためには、大会に出場することが一番だと考えています。何のためにロボットを製作しているのかを明確にするとともに、大会で優勝することを目標とし、真剣にものづくりに取り組むことで、完成した時の達成感や優勝した時の充実感を味わうことができます。特に、難しい課題に直面して、悩みながらもその課題を解決するためのアイデアを思い付いた時の達成感、真剣に取り組んでいないと味わうことができない経験です。高校入学後に活躍の場を見いだせなかった生徒などにとっては、この達成感や充実感、高校生活の中で貴重な経験になると思います。

③については、ロボット製作を行うためには、金属板を加工したり丸棒を削ったりする機械系の知識、基板を製作して配線するための電気電子系の知識、マイコンを使ってプログラミングを行う情報系の知識などが必要となります。そのほかに、木材を使ってコートを製作するためには、建築系の知識なども必要となります。私が指導しているこの部活動には、いろいろな学科の生徒が入部してきますが、所属している学科以外の知識も自然と学ぶことになるので、自分の幅を広げることができ、三年生になってからの進路決定の際にも効果的で、就職してからも有効に活用できます。

このロボット製作は、知識の幅が広くとても難しいものですが、目的をもって真剣に取り組ませることで、主役の生徒は想像を超える成長を見せてくれます。

若手の先生方も、生徒に対して的確なアドバイスができるように、自分でも世の中の新しい技術などを積極的に学んで、ものづくりの楽しさをいろいろな形で伝えていただきたいと思えます。

県立宇都宮工業高等学校

宮田 真寿

集団活動で成長する

学校行事、学級・ホームルーム活動、児童・生徒会活動等を含む特別活動。それらの活動に対して主体的に取り組む子どもを育てたい。でも、効果的な方法がよく分からない。このように悩むことはありませんか？ 活動後、子どもたちが「楽しかった、またやりたい」と感じていても、「活動あって学びなし」になっているかもしれません。

特別活動において、活動を通して学ばせる上で大切なことは、教師が活動のねらいと育てたい資質・能力を明確にすることです。そして、子どもたちにも「この活動を何のために行うのか」「どんな自分になれるのか」という見通しをもたせることが大切です。このことが、子どもたちの主体的な取組を促します。同じ目標に向かい、各教科・科目で育成された資質・能力を発揮しながら他者と関わり合って活動することで、よりよい集団が作られていきます。充実した特別活動は、よりよい学級経営や学力向上、さらにはキャリア形成、問題行動の未然防止、道徳的な実践にもつながります。

本冊子の内容からも、特別活動を通して子どもが成長し、集団としても成長することが分かります。皆さんも子どもたちが活動後に大きく成長した姿を見て驚いた経験はありませんか？ 子どもの成長に関われることは、教職の大きな魅力ですね。

関係資料のご案内



「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動」
(小学校編)

国立教育政策研究所
2018年12月



「学級・学校文化を創る特別活動」(中学校編)

国立教育政策研究所
2016年3月



「学校文化を創る特別活動」
(高校編)

国立教育政策研究所
2018年8月



自立と社会参加を目指して

特別支援教育と私

私は、今年、教職二十三年目を迎えました。この内七年間、私は特別支援教育に携わり、現在はそれを生かして通常の学級を担任しています。今、一生懸命、特別支援教育で奮闘している先生方や通常の学級で悩んでいる先生方のお役に少しでも立てばうれいす。

私が、特別支援教育に携わるようになったのは、学生時代に、専攻する学科のほかに、当時の養護学校の免許を取得したことがきっかけです。学校で働くようになり、学んだことがなかなか生かせないもどかしさに直面することも少なからずありましたが、そんなとき、尊敬する先輩教師から「特別支援学級を担任してみない？」と誘われました。折しも現場は、特殊教育から特別支援教育へと変わったばかりでした。学生時代に学んだ知識も古くなってはいましたが、かつて学んだ経験が背中を押してくれて、一念発起しました。自分では手を挙げる勇氣と覚悟がもてずにいましたが、あのとき、声を掛けていただいて、本当によかったと感謝しています。

特別支援学級を担任して一番学んだことは、「子どもたちへの寄り添い方」です。それまで私は、子どもたちにどんなときでも平等に接することが正解だと思っていました。例えば授業は一律に同じ方法で問題を解かせていたし、「ここまでは絶対に理解をさせるぞ」と一律に最後まで終わらせるようにしていました。でも、個性豊かな特別支援学級の子どもたちと過ごすうちに、みんなと同じにすることがとても辛い子もいることに改めて気づきました。個々の子どもたちの実態に応じて指導していくことが大事なのではと思うようになりました。もちろん、十分な配慮は必要ですが、「本来はここまでが指導計画上の目標とな

っているが、最低でもこのあたりまでは確実に理解させたい」と二段階を想定しておき、授業では柔軟に対応していくことで、気持ちに楽になる気がします。

また、特別支援学級では、その子によって学びやすい方法が違っているため、どの方法が適切なのかを探りながら学習を進めます。このことは、通常の学級を担任している今も、とても役に立っている考え方です。「指導と評価の一体化」と言われますが、子どもたちの様子を見取り、反応が薄かったり、手応えが感じられなかったりしたときには、すぐに指導の方法を振り返り修正する癖が付いたのは、このときの経験のお陰だと思っています。

教師として、私が大切に心掛けていることは、いつでもアンテナを高く張り、自分を磨き続ける意識をもつことです。授業力を高めたり、児童の変化に気付いたりするためには、感度のよいアンテナをもち続け、常に自分をバージョンアップさせる必要があります。そのため、どんな年齢や立場になっても「謙虚さ」と「学ぶ姿勢」を忘れないようにしたいです。また、最近、自分の中で大切に思っているのは「つなぐ」という考え方です。学習していることを既習の学習内容や知識とつなぐ、教師と子どもたちをつなぐ、子ども同士をつなぐ……。コーディネート力が問われますが、子どもたちが物事を主体的に考えるきっかけを与えたいと思っています。

教師の仕事は、子どもたちにたくさんの「種を蒔くこと」だと思います。いつ芽を出すか分からないけれど、栄養を与え、水やりを続ける。そしていつか「あのときの種がきっかけだった」と子どもたちに思ってもらえる瞬間がきたら幸せだなと思う今日この頃です。

野木町立新橋小学校

吉田 理徳子

「応答する環境」を目指して

「楽しくやることが大切だから」

これは、通級指導教室の担当になると決まったときに校長先生から掛けられた言葉です。そのときの私には、この言葉はあまりにも漠然としていて途方に暮れたことを覚えています。幸い一年目には、現在の栃特連北部支部言語難聴班の先輩諸先生方が指導方法や私の悩みに丁寧に答えてくださり、二年目には内地留学の機会をいただきました。

内留指導の担当の先生が常々口にされていたのが「応答する環境」という言葉でした。社会心理学者ムーアが「子どもの環境への働きかけに対して、環境からの適切な応答性が子どもの知的好奇心を喚起する」と提唱したものです。私は「環境」を「人・場所・もの」と考えています。かかわり手が子どもにとって「なじみの人」に、居場所が「なじみの場所」になり、学習も「なじみのもの（活動、教材・教具）」になるなら見通しが立ち、楽しく分かりやすく、それが安心につながって学習が成立します。特別な支援を必要とする子どもたちの多くは成功体験が少なく、新しいことに取り組むときには不安が強くなりがちです。ですから、子どもの活動中の様子によく目を向け、うまくいっていれば続け、難しそうだと思われたら止めて、違う方法や教材・教具を考えるようにしています。

そうしてうまくいっている環境の中で、子どもたちの何を伸ばそうかと考えたときに思いつくのが、当時の矢板中学校沢分校の教頭先生のお話です。「子どもが自分の気持ちや考えを言葉で適切に表現できるようにしてあげましょう。『うざい、めんどい、無理』としか表現できないなら、それを改善するとその後の行動が整ってくる」ということです。

特別支援学級では、子どもと教師が一緒に過ごす時間も長く、様子や状況を把握しやすいので、その時々や行動や気持ちを大人が言語化してあげられます。それを子どもが徐々に自分の言葉として使えるようになってくると、うまく生きていくことができるようになります。

偉そうなことを書きましたが、自分自身の子どもへの支援がいつもうまくいくわけではありません。「よかれと思って掛けた言葉や支援が逆効果になってしまった」ということも何度となく経験しています。失敗は成功のもとと自分を慰めつつ、帰る車の中ではよく「一人反省会」をします。「○○と言ったら、子どもの顔が曇ってしまった」「△△の教材を□□に変えたらはかどったな」などです。繰り返し返すうちに自分の声掛けや支援もうまくなってきたような気がすると同時に、帰宅後は仕事のことや考えずに済みます。以前は就寝前に考えすぎて寝付けなくなったことがあったので、引きずらないようにしています。さらに、困ったことがあれば一人で抱え込まず、周りの先生方にSOSを出すのもよい方法だと思います。三人寄れば文殊の知恵ですから、必ず策が見つかります。学校のチーム力を借りましょう。

今も、日々の試行錯誤は続いていて、「楽しくやる」の答えは模索中ですが、子どもが私の顔をよく見てくれて、私もその子にきちんと応答できているときには「楽しくやる」ことを共有しているのではないかと感じます。最後に、皆さんに読んでいただきたい本をご紹介します。何かのお役に立てば幸いです。

『ことばをはぐくむ』中川信子著（ぶどう社）『子どもへのまなざし』佐々木正美著（福音館書店）『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹著（エスコアール）

那珂川町立小川小学校

山本 敏江

子どもたちと共にあること

通常の学級の担任時代は、一斉指導の中での個への関わり方について試行錯誤した。たくさん個性に触れ、集団で物事に取り組み得られる達成感にやりがいを感じながらも、不登校や発達障害傾向の子どもなど、一斉指導の中で困っている子どもへの関わり方は難しく、学習や行動面での課題に対する対応の仕方について悩みや不安は尽きなかった。そのたびに、発達障害や支援方法について学び、先輩の先生方からのアドバイスに励まされながら、支援の方法を模索した。リズムに乗せると覚えやすい子どもがいることなど様々な方法に取り組みながら、一斉指導の中で個を意識した支援は、クラス全体や他の子どもへの支援にもつながることを実感できた。そして、もっと個別に関わり、子どもに自信をもたせたいと思うようになり、特別支援教育の世界に飛び込んだ。

言語障害通級指導教室の担当時代は、遊びの中に学びがあること、子どもの興味・関心に寄り添うことの大切さを実感した。

Aさんとの初回の授業の時のこと。Aさんは挨拶もそこそこに、目に入ったプラレールに飛び付いた。初めての出会いを成功させるため、事前情報をもとに活動内容を考えて臨んだが、時すでに遅し。タイムマーをセットしても、保護者が声を掛けても切り替えられなかった。保護者も見守る中、焦りは募るばかり。しかし、Aさんが楽しそうにつなげている姿を見て、自分が気持ちを切り替えた。保護者にも一声掛け、授業時間内全て、部屋いっぱいプラレールをつなげることにした。結果、それでよかった。満足した様子で帰宅し、次回からは少しずつ言語に関する指導ができるようになり、活動の切り替えもできる

ようになっていった。個別指導だからこそ、子どもも自分の欲求を通そうとするのだと実感した。保護者の願いを受け止めながら、子どもの興味・関心を生かして教材を作成したり、指導方法を考えたりできる自由度の高さにやりがいを感じた。そして、週一、二回の限られた回数ではなく、毎日子どもたちと関わり合いたいと思うようになった。

そんな時、特別支援学校への交流研修の機会を得た。言葉が話せなくても、相手の目や表情を見て思いを伝えればコミュニケーションはとれること、長期的な計画の中で少しずつ繰り返すことが「できる」につながることに、全てに手を差し伸べるのが適切な支援ではないことなどを実感した。毎日が驚きと戸惑いの連続であったが、楽しく貴重な経験ができた一年間であった。

現在、私は特別支援学級の担任をしている。毎日「おはよう」と声を掛け、子どもたちを迎えることができ幸せである。小集団の中で一人一人に寄り添い、じっくりと関わりながら、少しずつの成長に喜びを感じる事ができる今の環境は、やりがいがある。今までの経験は大きな財産となっているが、特別支援学級の担任を経験しなければ気付けなかったこともたくさんある。教育課程の作成や教科書選択のときなど、現在だけでなく将来をイメージすること、長期的に途切れずに支援することの大切さに気付かされる。今を楽しく過ごしながらも、責任ある立場にいることを忘れてはならないと気持ち引き締まる。子どもたちの未来が、小学校での経験や自信が土台となり、笑顔で過ごしている日々であってほしいと願う。そのために、今できることに熱意をもって取り組み、仲間と助け合いながら充実した日々を過ごしたい。そして、子どもとの関わりを楽しめる人でいたい。

那須塩原市立黒磯小学校

齋藤 由紀恵

副園長の教え

大学を卒業した後、最初は中学校の国語の教師になろうと考えていた。そんな自分が、「特別支援教育」の分野の教師として長く仕事をするきっかけとなったのは、かつて私の地元である飛騨高山市の障害者授産施設で働いた経験だろう。

この施設は、当時、岐阜県の飛騨地方では唯一の障害者授産施設で、飛騨養護学校が同じ敷地にあった。施設は、二十歳までの方々が暮らす建物と成人が暮らす建物に分かれており、私は成人を支援する職員として勤務した。

この施設は、通所と入所があり、入所者の割合の方が多かった。私は四人部屋の入所者の担当として、食事や入浴の介助、必要な日用品の用意、休日の郊外活動支援（この後に出てくる投票所への付き添い等）など、いろいろな支援を行った。

職員の勤務時間は、日勤・早出・遅番・夜勤と勤務スケジュールが生まれ、正月などは実家に帰れない入所者の方たちと施設で新年を迎えることもあった。

施設の方たちは、能力に合わせた作業を行い、その他の時間は共同スペースや自分の部屋で過ごしていた。私は重度の方たちの作業班の支援をしていた。作業というよりは機能訓練や体力づくりを兼ねた散歩などを毎日行った。大学で学んだことは役に立たず、いろいろな職務については一つ一つ先輩職員の指導を受けながら学んでいった。

この施設の副園長から教えていただいたことの中で、今でも忘れられないことが二つある。

一つは、「人はいくつになっても成長できる」ということ。私が担当していた重度の方

の食事介助を行っていたとき、近くに来た副園長が「この方は、最初スプーンを持つこともできず、口だけ開けて待っていたが、約十年根気よく支援した職員と本人の努力で、スプーンを持たせれば自分で口まで運ぶことができるようになった。人は成長する速さの違いはあっても、必ず成長する。だから他人がもう無理だと決めつけてはいけない」と言っていた。

もう一つは、施設の職員としての自覚と責任。成人の方と投票所に出掛けるときに副園長が、「この方たちは、私たち職員の言動を見本として行動してしまう、とても素直で純粋な人だ。だから選挙のときに、私たちが不用意に候補者の名前を言わないよう注意する必要があります」と話していた。

その後、縁あって宇都宮で教師という仕事に就き、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級、難聴特別支援学級、肢体不自由特別支援学級を担当し、たくさんの生徒たちと関わった。難聴特別支援学級では指文字や手話を覚え、肢体不自由者の介助を学び、職務以外では、特別支援学級卒業者の余暇活動を支援する「あすなる青年教室・ひのきクラブ」の実行委員として卒業生と二十年以上時間を共に過ごしている。その時間の中で、どんなときも生徒の成長を信じて支援・指導し、生徒の将来に影響を与える者としての自覚と責任をもって接してきた。これは三十年以上に経験した障害者授産施設で副園長から学んだことにつながる。

宇都宮市立晃陽中学校

松本 有紀

出会ってきた言葉、大事にしていること

子どもの顔を見ているのが好きだ。心のスイッチが入って、頭の中がぐるぐる回り始めた時の顔。私が長く関わってきた聴覚障害教育では「言葉」を育てることが大切なテーマだ。子どもの表情をよく見て、「今だ」というタイミングで言葉掛けをしながら言葉の引き出しを広げていく。子どもが心で感じたこと、頭で考えたことを「言葉」という形にして他者に伝えられるようになってほしい。言葉は思考の種。大事に育てていくことで、子どもの未来が広がっていく。初任の頃、先輩教師に言われた言葉が、今も胸の中にある。「やりがいのある仕事だけれど、教師の責任は重いわよ」

初任で赴任したのが聾学校だった。周りには聴覚障害教育のプロである先生方がたくさんいて、職員室に飛び交う会話、教室や廊下の掲示物、全てが教材研究のようだった。今の時代、インターネットで検索すればたくさん情報が得られるけれど、若い先生方には、遠慮をせずに、ぜひ先輩教師に直接質問することをお勧めしたい。なぜなら、そこには貴重なおまけがついてくるからだ。学級や授業の悩みを相談すれば、先輩が経験から得た知識や技術を教わることができる。会話を通して、その先生ならではの子どもの方を見方や考え方に触れることができる。その時分からなくても、後になって「あの時あの先生が言っていたことはこういうことか」と気付くこともある。このおまけの価値が大きいのだ。

「交流に行ったとき、言葉がまだ話せない子の自己紹介を先生が代わりにしちゃうのが気になるの。本人は全然違うことを言いたいかもしれないのに、確認しないのは失礼よね」職員室でそう話した大ベテランの先生は、その後、机をたたいて「イエス」「ノー」を確

認する方法をその子と共に編み出し、発展させた。気持ちを表す方法を知ったその子の表情はみるみる豊かになり、自分から何かを伝えようとしようになつていった。言葉を話せないからといって、何も思っていないわけではない。子どもの心と言葉を何よりも尊重するその姿勢から「教師がどう向き合うかで子どもは変わる」ことを学んだ。

初めての異動は、県立の幼稚園だった。晴天の霹靂と戸惑う中、校長からは「初めてだからなんて許されない。六か月でプロになりなさい」と厳しい一言をいただいた。「専門性を高める」ことは教員である以上避けては通れず、学校が変われば、求められる専門性も変わってくる。楽なことではないが、その時々に関心するべき仕事に取り組んで身に付けたスキルは、次の仕事にも必ず生きる。「環境の構成」という視点もその一つだ。子どもは身近な人や物と関わり、様々な経験をjして育つ。だから、保育現場では、子どもの成長に合わせて安心して楽しむ環境を準備する。これは、保育に限ったことではない。安心できる居場所、やってみたくなる活動、あれこれ考え試せる時間は、全ての学校に必要であり、教員も環境の一つなのだ。プロだと胸を張れるよう、心していきたいと思う。最後は、かつての勤務校で出会った尊敬する校長先生からいただいた言葉で締めたい。「先生方一人一人にいろいろな思いや考えがあり、それを一つにするのはなかなか難しい。それぞれの歩幅、歩き方でいいから、つま先だけは同じ方向を向けていきましょう」学校には、個性あふれる先生方がいて、それぞれの立場で懸命に子どもと向き合っている。学校の中には、大切な子どもたちがいる。そのことを忘れずに、今の自分にできることを丁寧に積み重ねていきたいと思つている。

県立豊学校

小川 友紀子

子どもの笑顔を連携の輪の中心に

「子どもたちの障害の有無に関わらず、学ぶことの楽しさや人と人とのつながりの大切さを教えられる教員になりたい」。そんな思いを胸に、大学卒業後新規採用教員として養護学校に着任しました。社会への出口が目前に迫る高等部では、職業教育の充実に向けた実践が学部全体で進められる中、卒業後一般就労を目指す生徒の担任を経験しました。ある時、担任する生徒Aは将来希望する職業について「保育士になりたい」と答えました。しかし同時に、資格取得が必要であり自分がその職業に就くことが難しいことも理解しており、静かに泣く姿がありました。教師歴の浅かった私は、担任でありながらどのように声を掛けたらよいのか分からず、肩をさすることしかできませんでした。

放課後、先輩教員にこの出来事を話すと、Aの思いが重なり胸がいつぱいになり気付くと涙が流れていました。「生徒の気持ちに寄り添い共感し受け入れることは大切。しかし、そこで終わりではない。特別支援学校の教師として、Aの障害の状況をしっかりと理解し、実態に合わせてAが前向きに考えられる職業や将来の姿について関係機関や先生方と連携しながらAを支援していくことがさらに大切だよ」と助言をいただきました。同学年や進路担当の先生方と日々Aを含む生徒たちの実態や特性に合う職業や進路を話し合い、本人や保護者の思いに寄り添いながらの支援・指導が始まりました。初めて障害者雇用を検討する職場からは、個々に応じた配慮や必要な支援について意見を求められました。一方、私自身が見えていなかった子どもの側面や求められる力などについて意見をいただくこともありました。先輩教員、職場の方々と相談し話し合いを重ねていくと、日常的に取り組ん

でいる支援が実習先では障害の理解となり、学校で現場に即した支援をすることがその後の実習や実際の就労と結び付き生き生きと働く姿につながることが分かりました。

年月を経たある日の量販店で「先生！」と声を掛けられました。従業員として働くAでした。その表情からは、晴れやかな笑顔とともに地域社会で自信をもって生活している様子が伝わってきました。児童生徒の将来の夢や希望、共生社会の中で生きていきたいという思いの実現を目指すためには、学校だけではなく様々な地域社会の方々との連携が欠かせないのでと理解しました。

次に勤務した病弱特別支援学校は、様々な疾患を有し心身への日常的な配慮が必要な児童生徒が在籍しており、日々の教育活動においては医療従事者との連携が必須となりました。教育と医療の現場では、子どもを捉える視点が異なりますが、退院後の前籍校復学へのスムーズな移行や、入院中でも学習意欲の向上が期待できる体験的な学習の実施について、その先にある子どもの笑顔を思い描きながら話し合いを重ねる姿勢は共通しています。子どもを中心に据えた学校を含む医療や福祉等の地域社会の関係機関が輪となり連携し、子どもたちの教育に携わっていることを再認識しました。

教師には、日々の子どもたちとの関わりの中で、その特性や障害の理解を丁寧に行い、そこで得た個々に応じた適切な支援や配慮の在り方を、学校から地域社会に伝え、連携し、つないでいく役割があるのだと思います。様々な視点から教育活動に携わってくださる地域社会の皆様感謝しつつ、連携の輪の中心にある子どもたちの笑顔に結びつく特別支援教育の在り方を探求し続けたいと思います。

県立国分寺特別支援学校

大西 真純

教師の楽しみとは

教師を志したとき、先生方は「子どもの成長の一助となりたい」という思いをもっていたのではないかと思えます。そして、楽しく分かりやすい授業によつて分かる喜びを得てほしい、苦勞を共にし、乗り超えた喜びを共に感じたい、という思いが今でも日々の業務をやり遂げる力になっているのではないのでしょうか。

特別支援学校に着任して初めて特別支援教育に触れた私は、個別の指導計画とチームテイーチングについて、どの校種においても生かせる素晴らしい仕組みだと感じ、先輩教師から多くのことを学びました。特別支援教育の魅力の一つは、個別の指導計画から想起するように、少しずつ課題を解決し、最終目標に到達する喜びにあると感じています。一緒に指導してきた同僚と喜びを共有し、そのときの児童生徒の誇らしそうな表情を見るのは何にも代え難い喜びで、充足感で満たされます。最終目標に向かって段階的に課題に取り組むときに、各段階の適切な課題設定と教材の準備が必要になります。そこで指標を示してくれるのがアセスメントであり、児童生徒の特性や得手不得手が見えて、次に取り組むべき課題が浮かび上がってくるのはご存知かと思えます。

特別支援学校の教師としてのほとんどを中学部で勤務してきた中で、小学部と高等部の間の三年間で何を目指し、何に取り組めばよいかを次第に意識するようになりました。特に、他県から来た私にとって、栃木県の教育方針を理解したことがよいきっかけであったと感じます。

前任の県においては、「得意なことを生かして不得意なことを補うこと」「得意なこと

を生かして社会で生きていくこと」を支援の大きな方針とし、個々の力を伸ばしていくことに取り組んできました。そして、アセスメントを基に、個々の興味・関心を生かした授業を進めていました。高等部における進路指導では、一人一人の個性に合う進路先を探す、という方針です。一方、本校では「社会で生活する姿を目指してこつこつ取り組んでいくこと」を大きな方針として、明確に目指す姿があること、その姿に向けての教育課程、教育計画が編成されていることに、着任当初、感心したことを覚えています。そして、小学部から中学部に進学した生徒たちを見ては、小学部での指導に感謝し、中学部の生徒を高等部に送り出すまでに、高等部での活動に必要なことをきちんと伝えて送り出そうという思いを強めていきました。さらに、学習を少しずつ積み上げる中で、生活年齢に応じた課題も見えてきます。それらの課題には、出てきたタイミングで適切に対応し、基本的に学段階に応じた指導内容からぶれずに取り組んでいくべきであるという考えに至りました。

一方で、児童生徒に必要な力、伸ばせる力をアセスメントにより把握し、教育課程に沿った内容での教材づくり、授業づくりをすることも求められます。私を感じている特別支援教育の魅力の一つは、準備した教材によって、児童生徒が生き生きと学習に取り組んでいる姿を見ることができると考えています。「伸ばしたい力」に近づくことは教師と子どもの小さな努力の積み重ねで得られるもので、これこそが教師としての腕の見せどころです。仕事の経験を積むに当たって、様々な役割を担うようになります。児童生徒との直接的なやりとりがない業務でも、別の角度からどのような支援ができるか、あの子やこの子の教材や授業を考えるように、楽しんで取り組んでいきたいものです。

県立足利中央特別支援学校

小林 文子

自信を育む特別支援教育

日本における障害のある子どもへの教育は、今世紀に入って行われた制度改革により、「特殊教育」から「特別支援教育」への転換が図られました。このことは、障害のある子ども一人一人の「特別な教育的ニーズ」を的確に把握し、必要な指導や支援を行っていく時代への移行を意味しています。

今、「共生社会の実現」が掲げられていますが、言い換えれば、多様性から生じる様々な違いを大切にし、全ての人の人権が尊重される社会を創ろうとするものです。特別支援教育は、現在及び将来の社会にとって、重要な意味をもっています。

本県は、特別支援教育を、障害のある子どものみを対象とした特別な教育ではなく、全ての子どもに対して一人一人の能力や特性に応じた指導・支援を一層充実させ、子どもが本来もっている力を最大限に発揮できるようにすることである、と捉えています。本冊子の内容からも、子ども自らが自信を育み周囲の人々と相互に支え合う関係を築くことができるように、多くの関係者が協働し、子どもへの理解を深め、安心感を高める指導・支援の充実に努めていることが分かります。

一人一人の子どもに目を向ける特別支援教育をみんなで充実させていきたいものですね。

関係資料のご案内



「初めて特別支援学級を担当する先生のためのハンドブック」
 栃木県総合教育センター
 2019年3月



「特別支援学校（知的障害）における国語科の指導の充実～平仮名の指導～」
 栃木県総合教育センター
 2021年3月



「栃木県特別支援教育推進計画」
 栃木県教育委員会
 2021年2月

A decorative rectangular frame with ornate floral and scrollwork motifs at the top, bottom, and corners. The text is centered within the frame.

協働を目指して

共に学び合うこと

幼児教育を学び始めたばかりの頃、「子どもの遊びは学びです。子どもと共に自分も学び続ける教育者となりなさい。幼児教育の専門家としての誇りをもちなさい」の言葉は、まっすぐに受け止めた私の目指す教師像となり、私は、学生時代に幼児教育の専門家としての大切な学びを得たつもりでした。

しかし、この恩師の言葉の深い深い意味を、保育者となり社会に出て痛感しました。まず、「遊びを通して学ぶ」ということに対して「幼稚園の先生は子どもと遊んでいるだけでいいよね」と何人もの人から言われました。その度に「その遊びの中にどれだけのことが込められているか？」と思いつつも上手く伝えられず、そのように認識されることに悔しい思いをしました。これは「専門家」としてまだまだ未熟だったからです。

専門家になるにはどうしたらよいか。それには実践や研修を積み重ね、学び続けるしかないのです。「学ぶ」ということは、研修を受けることだけではありません。新しい情報を得るための文献を読むこと、新聞の記事から社会や地域の動向に目を向け、出掛けた先で体験し感じたことや目にしたこと、遊びの素材の発見や表現の幅を広げることなど、視点を変えると、日常の中に学びを得る機会はたくさんありました。

また、子どもたちによい環境設定が必要であるように、自分の目指す保育が展開できる環境の園に出会えたこともここまで私が保育を続けられた一つだと思えます。同じ思いをもった仲間と語り合い、お互いを認め合い励まし合い「子どもたちにとって何が大切か」という同じ方向を向いて進み、一人一人の保育者が自分のもっている力を発揮できる園に

出会えたことが、私を「専門家」として成長させてくれた一つだと思ひ感謝しています。もちろん尽きない悩みや、困難に苦しくなり、保育と違うことが経験できる場所を求め新しいことに興味が向くこともありました。そのように悩んでいる時は、立ち止まり考える時間が必要な時です。「自分が志したことをやり切ったのか。悔いはないか」と立ち止まって問い掛けます。そして私はいつも「ここでやるべきことがあるのでは」と答えを出し、新たな気持ちで子どもたちの中に入っていきます。それは「専門家」としてのプライドです。そうやって思い悩み考えることも糧となり次へのステップとなりました。

様々な経験を積み重ねると、その状況に応じた役割が出てきます。クラス担任としてだけではなく、新人の先生たちへの指導や助言、全体を把握して動いたり考えたり、高度な保護者対応など求められるものがどんどん増えてきます。保育以外の様々な知識や対外的なやり取りも必要となってきました。本当は一日中子どもたちの中で泥んこになって遊んでいたのですが、自分にしかできないことを求められ、その役割を果たすことも大事なことだと思っています。「責任が重くなる」と敬遠されがちですが、私は失敗を怖がらずまづやってみます。分からないことを知っていく喜びや楽しさ、出会い、知識、それらのすべてが自分の人生を豊かなものにしてくれると実感しています。

現在は、幼稚園から幼保連携型認定こども園へ移行して六年目です。三歳から五歳児の幼児期中心の保育に加え、0歳児からの乳児期にも携わるようになりました。乳児期における「遊び」は奥が深く毎日発見と驚きの連続です。これからも、子どもと共に心を動かす、子どもと創り出す毎日を面白がりながら学び続けていきたいと思ひます。

みふみ認定こども園 石戸 奈緒美

憧れの存在を目指して

私は、現在、矢板市にある認定こども園かしわ幼稚園に勤務しています。矢板市は、自然が多く、季節の草花や生き物にたくさん触れられる環境にあります。そこで、戸外遊びや散歩、植物の栽培や収穫など、その豊かな自然を取り入れ、子どもたちの実体験を大切にしながら保育を行っています。

私が新人だった頃を思い起こすと、日々の保育や行事など、初めてのことばかりで戸惑い、不安を感じるとともに、目の前のことに精一杯になり、見通しをもって生活していくことができずにいました。また、子どもたちを取り巻く状況は刻一刻と変化しており、教育に対するニーズなども変わっていつていくことを感じました。そして、未熟な自分の保育や保育教諭としての在り方に自信をもてずにいきました。その私を少しなりとも成長させて、保育教諭として子どもたちに関わっていきたいという気持ちを強く支えてくれたのは、我が園の取組でした。

まず、我が園では、教育目標を踏まえた教育課程や指導計画がしっかりと確立されています。時代の流れや幼稚園教育要領の改訂などに合わせて評価され、現場の保育教諭の声を取り入れながら改善されてきました。また、認定こども園へと移行した際にも、乳児の発達の特性を踏まえた教育課程が新たに加わりました。この教育課程が明確であり、園全体で共有されていることにより、教育目標に向けて子どもたちをよりよく成長させていくとする指標となっています。日々の保育の中で、様々な時期の子どもたちの発達段階や具体的なねらい、内容などが明確であると、乳児期から幼児期への子どもたちの通る発達

の道筋がとても分かりやすく、新人であっても、経験者であっても共有できます。そして、教育課程を指針としながら保育を進め、子どもたちの教育の機会を保障していくためには、保育教諭一人一人の力が必要だということを痛感しました。

その保育教諭として自分の力を高めていくためには、研修を受けることの大切さを感じました。我が園では園内研修の一環として毎年研究保育を行い、子どもたちの発達段階に応じたねらいや活動の内容、環境構成や保育教諭の関わりなどを考慮しながら保育を計画、実施をし、自己評価と共に客観的な指導をいただいて改善点を見いだし、次へと生かしています。継続して行っていくことで、自分の保育を見つめ直すことにつながっています。また、園外での研修にも参加させていただき、いろいろなテーマに応じて専門の先生方のお話を伺い、また、他の園の先生方の考えや取組などに触れることができ、とてもよい学びの経験をさせていただいています。園内外の研修を通して、アンテナを高くして、教育の質の向上を目指して更なる成長へとつなげていきたいと思えます。

新人の頃から、子どもたち一人一人の特性を踏まえつつ、また、教育課程を大切にしてきた先輩方の教育を引き継げるように、背中を見ながら続けてきました。しかし、経験を重ねてきた今も、日々反省をしたり、後輩の先生方と切磋琢磨しながら新しいことを学んだりしています。最近では、卒園生が保育教諭を目指している姿が見られます。大好きな先生の真似をして幼稚園ごっこを楽しんでいる子どもたちにとっても「幼稚園の先生」というのは、特別な存在なのだと思えます。その姿に喜びを感じつつ、憧れの存在として身を引き締め、これからも学び、成長していきたいと思えます。

認定こども園かしわ幼稚園

大久保 美文

辛い経験を乗り越えて

認定こども園で働き始めて十四年目となり、学年主任として日々保育に携わっています。時には仕事の大変さを感じることもありますが、今、職場の仲間と一緒に楽しく保育現場に出ています。

思い返せば一年目、初めて年少組の担任となり毎日悩みながら保育をしてきました。そんなある日、ベテラン保育者が私のクラスへ入り一緒に保育をしてくれた日がありました。すると、子どもたちはベテラン保育者の周りに集まりました。自分の保育の力不足を痛感しました。その時は、分からないことばかりで自信がなく、悲しみの感情でいっぱいでしたが、この経験があったことで「保育を学びたい」という意識が強くなったのを覚えています。

四年目には、初めて年長組の担任となりました。年長組の仕事量の違いや卒園に向けてのプレッシャーなどに押しつぶされそうになりました。しかし、卒園を迎え子どもたちを送り出したことにより、子どもたちの大きな成長を感じることで、「保育のやりがい」を感じられるようになりました。

八年目に、初めて学年主任となりました。学年をまとめたり、担任の相談に乗ったりと、担任の時とは違う悩みを抱えて毎日仕事をしていました。学年主任になってからは、保育を客観的に見たり、職員の悩みを聞いたりすることが多くなったことで、子どもの育ちと保育者の成長の二つの視点で考えるようになりました。

ある年、若手の職員が退職したことがありました。その時にどうして辞める選択になっ

てしまったのかと考えるようになり、そのことがきっかけで「働きやすい職場づくり」ということを意識するようになりました。

振り返ってみると、子どものこと、保護者のこと、保育者のことなど、たくさん悩みを抱えながら毎日仕事をしてきたと思います。辛いことがあつて時には辞めたいと思つたこともありませう。しかし、今ではその辛く悩んだ経験があつたからこそ、社会人として保育者として成長できたと思つています。辛いことを乗り越えられたのは、職場の同僚や上司に相談することができ、悩みを一人で抱え込まずに済んだからです。誰かに話してみると解決できたことがたくさんあつたので、人とのつながりを大切にできたらいと思ひました。

また、働き続けている中で大切にしていることがあります。それは、子どもはもちろんのこと、保育者の間でも同様に、「相手の思いを受け止める」「自分も大切だけど相手も大切」ということです。子どもの成長を願つて保育するには、まずは保育者の心の安定も大切であると、今まで働いてきた中で感じました。仕事で悩んだ時には、お互いの思いを伝え合うことで、同僚性が高まり、働きやすくなるだけでなく、楽しみながら保育できると思ひます。私自身、仕事が楽しくなると、保育を学びたい、深めたいという気持ちが高まつていきました。長い年月が経ちましたが、この仕事をしていてよかつたなと感じていひます。

認定こども園あかみ幼稚園

久保 智美

人とのつながりを大切に

学校事務職員として採用されて二十数年が経ちます。今こうして仕事を続けてこられたのは、周囲の出会った方々に支えられ、本当に恵まれた環境だったからだと思いません。

私以外の同期の事務職員は一人配置校に採用されていたため、「いろいろ大変だ」という話を新採研修等で聞くことも多々ありました。しかし、一方で、どんどん仕事を吸収して覚えていく同期の姿が見られました。当時も今もそうですが、新採教員には新採指導教員がいますが、新採事務職員には指導者がいません。一人配置校勤務の事務職員は事務処理について校内で指導してもらうことが難しいため、近隣の学校の先輩事務職員に教えてもらいながら事務処理を進めていくという大変さが最初にあると思います。

私の新採としての勤務は、事務職員の複数配置校である中学校から始まりました。その勤務校にいる間に、私は二人の事務長にお世話になりました。仕事はもちろんです。仕事以外にも、社会人として、学校事務職員として、常に隣で指導していただきました。些細な疑問や見当違いな質問などにもいろいろ丁寧に答えていただきました。ミスをしたときには厳しい指導もしていただきました。身近に指導してくださる方がいたという点では、恵まれた環境にいたと感じています。

当時、事務長のところには多くの先生方がやってきました。困った顔で相談に来る先生、雑談に来る先生など様々でしたが、事務長は忙しい中でもいつも直ぐに対応していました。解決策をいろいろ考え、先生方のためにPCを使って書類等を素早く作成し、時には脚立

を担いで修繕に向かうなど、ゆっくり座っている時間もあります。フットワークが軽く、ひたすら先生方のために、そして子どもたちのために、校舎内を走り回っていました。保護者や地域の方も事務室にやってきました。今思えば、「地域連携」のような役割を担っていたのかもしれない。そんな姿を傍で見せていただき、仕事に対する誠実な態度や責任感など、たくさんのことを学ばせていただきました。事務長は先生方からも地域の方からもとても信頼され、そしてどんな問題も解決に導いて、私にとっては事務職員の鑑のような存在でした。私も事務長のように誠実に仕事に取り組んでいこうと思いました。今でも尊敬する事務職員の一人です。年を重ねてもなかなか近付くことはできませんが…。

私が採用された頃と今とでは、事務職員を取り巻く環境もずいぶん変わってきています。共同事務の制度化、学校経営への参画、働き方改革など私たち事務職員への期待や求められるものも多岐にわたります。最近では、様々な採用形態の職員も増え、事務処理も煩雑です。そしてコロナ禍で学校での生活様式も変化し、先の見通しが立たない予測困難な状況でもあります。一人職種ということで大変なときもありますが、そのようなときは、いつも周囲の方々にお世話になっていきます。一人職種だからこそ、「人とのつながり」がとても大切だと感じています。

学校では、日々、子どもたちから元気やパワーをもらっています。その未来を担う子どもたちのために何ができるのか、今の私たちにできることを考えながら学校経営に参画し、事務職員として時代の様々な変化に対応していけるよう、これからも「人とのつながり」を大切にして、たくさんの方と出会い、共に学び、成長していきたいと思えます。

野木町立南赤塚小学校 鈴木 智美

ささやかだけれど大切にしたいこと

「すごく、うれしかったです」

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、全国的に学校が臨時休校となった二〇二〇年三月。担任していた六年生四クラス百三十八名の子どもたちはどのような思いでいたのでしょうか。自分たちの卒業式は、もしかしたらできないのではないかと考えていたかも知れません。しかし、在校生はいなくとも、教職員の温かな語り掛けの言葉と保護者の愛情あふれる拍手に包まれ、卒業証書を手にする事ができました。式が終わり、教室に戻ったからの子どもたちのこの言葉には、喜びに満ちた本当に「うれしい」気持ちが表示されていました。そして、「大人は、大変な状況でも自分たちのことを思って動いてくれるのだ」と感じたことを話してきました。

子どもたちに「大人になるのもいいものだ」と思ってもらいたいです。学校で一番身近にいる大人は私たち教職員です。学校は、私に多くの子どもたち、そして多くの同僚であり仲間であるすばらしい大人とも出会わせてくれました。

今、目の前にいる子どもたちにもどのように育ててほしいですか。毎日をどのように過ごしてほしいと願っていますか。友達と仲良く、笑顔で、元気に、思いやりをもって、挨拶ができて、それから一生懸命学習してほしい。様々な思いが浮かんでくることでしょう。笑顔いっぱいの子どもの仲良しな学級や学年をつくりたいなら、学年の先生方いつも仲良く笑顔で話そう。何事にも全力で取り組む学級・学年にしたいのなら、私たちも全力で。挨拶ができる子どもたちにと願うなら、毎時間、教室に入るたび「こんにちは」。ほかの

クラスに入るときも「こんにちは」。ずっと朝から一緒にいるからしないのではなく、いつでも、当たり前前に、何度でも、気持ちのよい挨拶を。出会った子どもたちと共に過ごせる時間は限られています。だから、いつでも意識的にしていくことは大切です。

学年を気遣い、学年で協力する。今日、学級であったこと、子どもたちの楽しい言動やうれしく思った出来事、気になることを学年の先生方と共有することを大切にしていきたいです。

ただ漠然と「いい先生になりたい」という思いで、これまで夢中でやってきた自分の学級づくりや学年の先生方、子どもたちとの在り方についてですが、子どもにとつて「いい先生」とは、どんな先生なのか改めて考えてみました。授業が面白い、分かりやすいというのはもちろんありますが、「先生は、クラス全員をかわいがってくれる、大切にしてくれる」と子どもたちが自信をもって言えるかどうかだと思います。これまでに出会った先輩や同僚の先生方の素晴らしいところを吸収し、本で得た知識をどう実践につなげるかを目の前の子どもたちの表情や言葉をもとに、自分なりに考えながらやってきました。私がこれまで受け取ってきた多くの先輩からの貴重なメッセージをしっかりと次に渡してつなぎ、その知恵や工夫を惜しみなく共有していければと思っています。

どんな世の中であっても、前を向いて笑顔で子どもたちと向き合うみなさんの毎日が、もっともつと輝くことを願っています。

さくら市立氏家小学校

吉永 恵

同僚性で校務分掌をよりよいものに

年間指導計画、学習の手引き、テスト、通信票、とちぎっ子学習状況調査…。初めて学習指導主任を担当することになった四月、ひたすら文書の作成・印刷・配布に追われ、なんて面倒な業務が多いのだろう、と困惑したのをよく覚えています。四年間学習指導主任を務め、今年度は他の校務に移りましたが、そうなる少し足りないような気がしてきました。「面倒」から「やり甲斐」に転じることができたのは、ひとえに周囲の先生方のご協力があったからにほかなりません。

中学校は教科担任制のため、自分が担当している教科以外は見えにくいところがあります。そこで本校では、とちぎっ子学習状況調査や授業改善に向けての分析を全教員で行うことにしています。すると、今まで気付かなかった生徒のよさや課題、改善へのアプローチ等、アイデアが次から次へと湧き上がり、絞り込むのが大変なほどでした。多くの先生方に協力してもらおうことになりましたが、学習指導主任としての業務を円滑に進めることができました。そうして設定した課題解決のための具体策に全職員が同一歩調で取り組んできたところ、確実に生徒が変わってきたという手応えを感じることができました。

また、学習指導を担当して二年目から、中学校区内の三小学校の学習指導担当者との連絡会議を定期的に行うことになりました。それまでも中学校区での乗り入れ授業は行っていました。そこでは気付くことができなかった小学校と中学校の違いをたくさん学ばせていただきました。この会議を通して、ノートの形式や学習規律の統一、児童生徒の共通の強み・弱みと課題の確認、小・中での家庭学習の在り方や方向性の確認などをしました。

三小学校で共通で実践されてきたことが基となっていて、生徒は中学校入学後の学習にスムーズに移行できるようになっています。これも一人では思い付くことも実践することもなかったことであり、様々な提案をしてくださった小学校の先生方に感謝の思いでいっぱいです。これは余談ですが、始めのうちは正式な会議ではなかったのですが、なるべくお互いに負担が少なく済むよう、夏休みにランチミーティングの形をとるなど、フレキシブルに行っていたところ、会話が弾み、より互いの校種への理解が深まったように思われます。

校務分掌として自分に割り振られた業務とはいえ、一人で全責任を負ってやらなければ、と思う必要は全くないと思います。むしろ様々な意見をいただくことで、相乗的な力や効果を生み出すことができるのではないかと思います。周囲には自分にはない様々な経験やアイデアをたくさんもった先生方がたくさんいらっしゃいます。その様々な意見をまとめていくことがよりよい教育活動につながると思います。

これまで四校で勤務させていただきましたが、どの学校でも先輩や同僚に恵まれ、たくさん学びがあり、成長しながら充実した毎日を過ごすことができました。経験年数が長くなり、多少助言できることは増えましたが、今も学ばせていただくことばかりです。これからも、周囲の先生方との同僚性を大切にしながら教育活動にあたっていきたいと思っています。

上三川町立明治中学校

宇都木 香緒里

学級担任が受け取るもの

今年度で教職二十七年目を迎えることになりました。自身の経験で周囲と異なる点といえば、勤務校の数が多いことです。臨時採用を除いても現在の勤務校は八校目、一校あたりの勤務年数は四年に満たないことになりました。教員としてのキャリアは、へき地校や小規模校での勤務が多く、地域の少子化に伴う学校の統廃合による閉校にも三度ほど立ち会うことになりました。最初の八年間は小学校の勤務、残りの十八年余りは中学校の勤務です。その中で二十三年間は学級担任をさせていただくことができました。このように話すと、大抵、「異動が多くて大変ですね」という反応が返ってくるのですが、自分自身は得がたい経験をたくさん積ませていただいたと考えています。

一年間の臨時採用を経て、教諭として最初に赴任した小学校は、上都賀郡の北部にある小中併設の学校でした。担任したクラスは八名ととても少なかつたのですが、学年をまたいで様々な活動を実施していたため、子どもたち全員に全教職員が関わっていくという姿が自然にありました。

次に異動したのは芳賀郡の小学校でした。統合により二校ほど勤務したのですが、どちらも単学級の小規模校でした。三校目の学校は当時としては珍しく、教職員の年齢構成が若い学校で、学級担任は全員二十代から三十代前半、互いに学級経営についてアドバイスをしながら、新しいことにチャレンジする気風にあふれていました。

四校目の勤務校は、別の町の中学校でした。中学校の勤務は私にとっては初めてで、戸惑うことも多かったことを今でもよく覚えています。特に困ったのは教科指導と部活動指

導でした。小規模校で自分以外に同じ教科の教員はいない状況。教材研究には熱心に取り組んだものの、思い返せば拙い授業を続けてしまったものです。部活動も未経験の格技、外部指導者の助けを借りながら何とか運営することができました。授業も部活動指導も、何とか形になったのは、生徒の協力のおかげ以外の何ものでもないと思います。もし、自分自身にやる気がない状況があれば、生徒は敏感にそれを感じ取り、頑張ってくれなかつたかもしれません。

その後、郡内の中学校への異動を挟み、六校目の異動は大学の附属中学校でした。不安はやはり教科指導。ここでは経験豊富な同僚の先生方の知見に触れ、自分自身の研修を深められたように思います。学校の性質上、年に何度か公開の研究授業があるのですが、先輩の先生方に言い含められていたことがありません。それは、担任するクラスがあると生徒が助けてくれるというものです。最初は意味がよく分からなかったのですが、公開授業ともなればいつも以上に準備をして臨むものです。そういった意気込みや熱意が伝わるのでしょうか、生徒たちはよく考え活発に意見を述べてくれるのです。多分、錯覚なのだと思います。授業が上手になった気がしたものです。

その後、現在の町に異動して、勤務は二校目になります。四年ほど前から担任を外れて学年主任をしています。やはり学級担任には学級担任にしか味わうことのできないやり甲斐があったと感じています。それは教師の熱意に応える子どもたちの頑張りを直接受け取れることだと思います。学年主任をしながら、若い先生にそんな経験をたくさんしてほしいと考えています。

茂木町立茂木中学校

堀口 勲

仲間と学校事務職員の未来を描こう

二〇一七年に学校教育法が改正され、事務職員の職務規定は「従事する」から「つかさどる」に変更されました。この改正で注目すべき点として、これからの事務職員は、事務の執行に関わる業務を担う者から、事務を計画し、その実施過程を管理する業務を担う者へと変更になった点や、すべての事務職員を学校経営への参画職として位置付けていくという方向性が明確に示された点が挙げられます。また、同年に地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正によって、制度化されたのが「共同学校事務室」です。事務の共同処理の実施に係る責任・権限関係の明確化、共同学校事務室でのOJTの実施による事務職員の育成及び資質・能力の向上など、事務処理の更なる効果的な実施や事務体制が強化され、学校経営における学校事務の果たす役割の大きさと、主体的、積極的に参画する事務職員の職能は、これまで以上に期待されることになりました。

さて、多くのベテラン事務長の方々が定年退職期を迎えています。これまで数多くの実務や実践経験を積み重ねてこられた力量を、一つでも多く後輩へ引き継いでいただきたいと考えていました。事務職員は多くの学校が単数配置であり、他の事務職員の日常的な仕事の様子を見る機会が限りなく少ないので、先輩から学ぶことが難しいのが現実です。そこで、地区の研修会にて多くの方々に、先輩事務長講話や実践事例を紹介する活動を実施しました。エクセルの活用を得意とする人、法規に精通している人、先生方とのコミュニケーションを大切にしている人など、個々に得意、不得意なこと、また、日常的に意識していることや、信念を強くもって勤務していることなどを、活動を通して知る機会とな

り、私は自らの力の無さを痛感することになりました。もっと早くこのような研修活動を実施していたら…と感じています。

これからは、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職として、段階的な知識や技能を習得し、専門性を高めるための、事務職員のキャリア形成が重要になります。特に、経験年数の浅い事務職員は、五年後、十年後の自分がどのような事務職員になりたいのか、意識して思い描くことも大切です。自分一人で学び、仕事上で直面する課題を乗り越え、高いレベルの仕事をしている人もいるでしょう。しかし、すべての事務職員がその高いレベルの仕事に到達することは難しいと思います。

ですから、複数の事務職員を同一の事務組織のメンバーとして捉え、事務職員が分担・協力することで、総体として高いレベルの仕事を遂行することができる、共同学校事務室での活動を通して、事務職員のキャリアアップを図り、身に付けた力量を学校現場で発揮することが必要だと思えます。さらに、地区・市町の事務研究会と連携することで、その成果も上がることが期待できると考えています。

ベテラン事務職員と経験年数の浅い事務職員が、互いに学び合い、切磋琢磨しながら協働し、学校経営に主体的、積極的に参画できる事務職員として、期待に応えることのできるよう、資質・能力の向上を目指したいです。そして、すべての事務職員が「つかさどる」にふさわしい職務を担っていく姿を、私は未来の学校事務職員の姿として描きたいと思えます。

那須烏山市立烏山中学校

大森 健史

経験は宝物

私が初めて赴任した学校は、通勤時間が三十分程度の中学校でした。初めての教師生活、教科指導、学年所属、部活動顧問等、社会人一年目の私にとって分からないことばかりでした。しかし、生徒や保護者との接し方、コンピュータの使い方や社会人としてのマナーや常識、礼儀作法に至るまで、本当に何も分からない私に、先輩の先生方は丁寧にかから教えてくださり、地域・PTAの方々も温かく支えてくださいました。私はこの中学校で、「教師」としてのノウハウや信念を学ばせていただき、大切に育てていただいたと実感しています。

校務分掌も、様々な役割を担当させていただきました。初任校である中学校では、初めは副担任として勉強できる期間をいただきました。それから、二年目、三年目となるに従い学級担任や、主任となる分掌を担当したのですが、今思えば、段階を踏んで経験を積めたことが、少なからず自信につながり、今の私を動かしているのだと思います。たった一年しか経験できなかった係分担任、長年携わった分掌等、担当したものは様々ですが、そのすべてが、今の自分の幅を広げてくれるものになっています。

しかし、誰もがこんなふうには思わないでしょう。初任一年目から学級担任を任せられ、多くの校務分掌を抱える先生方は、たくさんいらつしやいます。私自身も、忙しい日々の生活が苦しくて、あふれる仕事に押しつぶされそうになり、「もう嫌だ」と感じた時もありました。そんな時は、どうすればよいのでしょうか。

実は、周りの多くの方々に、私は支えられてきたのです。きっと先生方もそうでしょう。

まさしく「チーム学校」です。教師を一人にしない、支え合いながら仕事ができる、望ましい職場の環境があります。そして、もし困ったことに直面した時は、先人たちの声を聞く、その分野を追究してみる等、多くを知り、経験することが必要なのだと思います。

また、その困ったことを解決するには、いわゆる「研修」も、その手立ての一つです。「研修」のよさは、自分の知識を深めたり、技能を向上させたりすることだけではなく、様々な意見を聞き、自分の経験を広げられることだと私は思っています。多くの方々と意見交換できたり、よく分からなかった内容を理解できたりすると、そこから安心感や自信が生まれ、自身の意欲や活力が強化されます。自然と答えが導き出されることもあります。自分のやるべきことが見えてくると、達成感も味わえるようになります。さらに、研修等を通して知り合った仲間たちも、自分なりの成長が感じられるはずで、さらに、研修等を通して知り合った仲間たちは、人生における財産です。悩んだ時、どうにもならなくなった時は、仲間たちに助けを求めることができます。時には、同じ職場ではないからこそ言えること、教えてもらえることがあります。

落ち込むことがあってもいい。人間そんなに強くない。失敗を失敗のままにせず、挑戦していくことが大切。「為せば成る」亡くなった祖母からの言葉ですが、教師になって改めて、私はこの言葉を自分なりに解釈し、モットーとしています。教師も一人の人間である以上、弱さもあるし、未熟なところもたくさんある。しかし、望ましい姿を求めて前向きに生きていくことこそ、子どもたちに堂々と胸を張れる「教育者としての姿」なのではないかと思うのです。

佐野市立常盤中学校

前田 和代

不器用だと思えば

私は、特に迷いがなく、自信をもって仕事に取り組んでいる方に対しては、参考になるようなことを書くことはできません。しかし、かつての自分がそうであったように、仕事に自信がもてず、何が自分の特徴なのかを探して苦労している方のためであれば、私の経験（と言うより考え方）をお伝えする意味があると思います。

さて、この度「学校経営」というテーマでの執筆を依頼されました。現任校で教務主任七年目を迎える経験を買われていることと思いますが、まだまだ力不足の私にはとても学校経営をしているなどという実感はありません。この六年余りの中で、新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの入学者選抜や一日体験学習などの行事の計画・実施、それらと並行して新教育課程編成作業やGIGAスクール構想及び新校務支援システム移行対応などを進めなければならず、「経営」と言うよりは「運営」に終始しているという実感です。それでも、学校が大きな変化への対応を求められるこの時期に、教務主任として無事にこれまで乗り切ることができたのは、二つの、自分ならではの要因があったからだと思っています。

一つ目は、物事の飲み込みが悪く、物覚えも悪いことです。

私はどうも飲み込みが悪いらしく、新しい仕事の見通しを立てるのが苦手です。さらに、物覚えも悪いために、新しい仕事でなくても「去年こうだったな」と思い出すことができないことが多々あります。仕方がないので、こんな自分でも分かるようにと仕事の流れをまとめる癖が付きましました。言うなれば自分自身のためのマニュアル作りです。結果的に、

この癖がコロナ対応において生かされたと感じています。とにかく行事の運営がこれまでどおりにはならないことばかりですので、細かな仕事であっても作業を想像しながら流れを紙一枚にまとめ、それをもとに先生方に個別に仕事をお願いするようにしました。個別にお願ひすることでその場で問題点を指摘されることもあり、マンユアルの改善にもつながりました。

二つ目は、自分に得意なことがないことです。

教員としての経験を積み重ねていく中で、生徒指導や進路指導あるいは学習指導や部活動指導において、自分よりはるかに優れた能力を発揮している先生方に出会い、自分には得意なことがないと感じるようになりました。おかげで、変にプライドをもつこともなく、誰に対してもどんなことでも質問したりお願ひしたりできるようになりました。自分の役目は周囲の先生方に能力を発揮してもらうこと、そのための場を設定したり人をつなげたりすることだと思っています。周囲の皆さんのおかげで仕事ができるようになっていく、そう感謝しながら仕事に取り組むと、自分の能力以上の働きをすることができるようになります。私にとって「感謝の気持ち」がすなわち学校を動かす「てこ」の働きをしてくれそうです。

二つの要因は、簡単に言えば不器用さであり、言うまでもなく短所です。しかし私はこの不器用さを克服しようとすることで自分らしく仕事ができるかと考えています。ですから、もし自分を不器用だと思ひ悩んでいる方がいたとしたら、それは自分次第で長所にするこ

気付き、輝く

壬生高校着任と同時にJRC部顧問となったことで、私は地域と関わる運命のルールに乗った。JRC部のボランティア活動は決まって週末だ。毎月一回土曜日に開かれる「あじさいサロン」は障がい者のための余暇レクリエーションだ。部員は準備や片付けなどの運営を手伝い、私は引率のため毎回参加した。当時まだ四才の息子を預けて休みの日まで仕事に出なければならぬことが苦しくて、最初の一年は前向きになれずにいた。

あるとき、自身の研修で就労支援施設に体験入所をする機会があった。障がいのある方とうまくコミュニケーションが取れるだろうかと不安を抱えながら門を叩いたのだが、何とそこには「あじさいサロン」で見た顔ばかりが並んでいた。さらに驚いたのは、皆が私の名前を覚えていたということだ。利用者の名前を覚える気もなかった私を、仲間として受け入れてくれていたと気付き、衝撃が走った。いつまでもぐずぐずと前向きになれない自分を恥ずかしいと思った。心を入れ替えるきっかけとなる忘れられない出来事だ。気持ちが前向きになると、自分の役割について考えられるようになった。生徒の様子もよく見える。知り合いが増えるとその日が楽しみになり、自分の中で「ただの引率」を卒業することができた。

では、生徒はどうか。ボランティア活動に積極的に参加しようという気持ちのある壬生高生なのだが、私は物足りなさや可能性の両方を感じていた。現地では懸命に与えられた仕事をこなしているのだが、生徒の様子を見ると、もっと次につながる気付きや新しい発想が生まれてくるようなボランティア活動にできるのではないかと考えるようになって

ていた。

二〇一九年十月、台風十九号が猛威を振るい栃木県各地に甚大な被害を及ぼした。壬生町社会福祉協議会より、栃木市の災害ボランティアに壬生高生も参加してもらえないかとの誘いを受けた。有志生徒と共に現地に赴いたのは台風から一か月後だったが、その爪痕は生々しいものだった。住宅の襖や障子、床板はすべてはがされ、基礎が見える骨組みだけの状態。生徒は泥かき作業をしながら、「みんなどこで生活しているのだろう」「お年寄りには大変な作業だが、手伝う者はいらるのだろうか」と住人を気遣う様子が見られた。高校生の学びの機会になればと、被災翌日の記録写真を見せてくださった。泥水が庭一面を覆う様子を見て、「静かで小さな川なのに氾濫すると恐ろしい」と驚きを顕わにした。

壬生町からは多くの大人のボランティアが参加しており、本校生にスコップの使い方を指南するなど温かく支援してくださった。六十代のあるボランティアの方から、若い人が来てくれるのはうれしいし、力になると言っていたことは生徒にとつて励みになった。生徒たちが事後に寄せた感想には、「人の役に立ててうれしかった」「作業はきつかったが、住民の大変さを思えば比ではない」「ありがとうと感謝され、やってよかった、また来たい」など前向きな言葉ばかりだった。生徒が新しいものに出会い、感じ、気付きを得る瞬間に立ち会えたことに感動した。生徒の成長を間近に見て、教員の使命を改めて感じるよい経験となった。

私たち教員は、生徒が新たな気付きを得ながら成長していく機会を作ることのできる幸せな役割を担っていると考える。これからも、生徒の目がきらりと光る瞬間を見るのが楽しみでたまらない。

県立壬生高等学校

石川 友紀

やればできる！

昨年度二十年目研修を終えて、改めて自分自身の教職生活の足跡を振り返りました。私がこの二十年の教職生活の中で力を入れて取り組んできたことは、教科指導はもちろん、保健体育科の教員ということから部活動の指導です。また、教員として生徒たちが成長していく姿を間近で見守り、夢の実現のために少しでも近くで携わりたいという思いから、毎年担任を希望して日々生徒たちと共に過ごしてきました。時代とともに変化する教育の在り方や生徒の実態に応じた指導は、頭を悩ませることもたくさんありましたが、やりがいや充実感のほうが大きく、教師としての私を一回りも二回りも成長させてくれました。しかし、校務分掌に関しては、特に意識してきたことはなく、与えられた仕事を円滑に遂行できるように関係職員と連携を図りながら取り組んできただけです。そのため、今回このような先輩教師からの校務分掌に関するメッセーの依頼を受けた時は、正直書くことが何もないと思ってしまうました。こんな私の経験談なので、参考にならないかもしれませんが、気楽な気持ちで読んでいただければ幸いです。

私は、先ほども書いたとおり、校務分掌に関しては自分で選べるほどの特化した能力をもっていないため、せめて依頼された仕事は断らず何でもやろうと、初任の時から心に決めて職務に当たってきました。しかし、一度だけ躊躇したことがあります。それは、前任校でカリキュラム・マネジメント推進委員会の委員長を依頼されたことです。カリキュラム・マネジメントの充実を図るためには、学校の教育目標を踏まえながら各教科の教育内容を相互の関係で捉え、教科等横断的な視点をもたなくてはなりません。保健体育科の私

には向いていないという固定観念があり、初めて断ろうかなという迷いが生じました。しかし、委員の先生方と協力すれば新しいものを構築することができるかもしれないと思い、委員長を引き受けることにしました。期待どおり、才能あふれる委員の先生方や同僚の先生方の協力を得て、私一人では思い至らなかつた発想力で現職教育の企画立案やグラウンドデザインや単元配列表などを作成することができ、最終的に研究成果を発表することができました。この経験から、全職員が協働的な関係を構築することができれば、その活力が学校全体の組織の活性化につながるというのを改めて実感しました。何かを作り上げるためには、様々な意見を集約し、調整しなければなりません、その前提としてあるのは日々のコミュニケーションを通じた教員間の協働だと思えます。打ち合わせや会議の場だけでなく、普段の何気ない会話の中から素晴らしいアイデアが生まれることもあります。そのため、私は日頃から同僚の先生方とのコミュニケーションを大切にしています。また、今回新しいことにチャレンジし、得た経験は教員としての資質向上につながったと自負しています。みなさんも、自分の得意分野を伸ばすことも大切ですが、自分自身で限界を決めてしまわず新しいことにもチャレンジし、同僚の先生方と協働しながらよりよい学校を構築することができきるキープアソンとして今後大いに活躍してください。

私は、この四月の定期異動により三校目となる学校に赴任しました。この新しい出会いをきっかけに、また新たな自分を発見し形成できるように生徒とのふれあいや先生方との交流を通して、今自分にできることを模索し、生徒にとって何が必要なかを考えながら日々奮闘しています。みなさんも自分自身の可能性を信じて、夢と希望をもってこれから教育活動に邁進してください。

県立さくら清修高等学校

久保田 由佳

進路指導を通して

進路指導を担当するようになり今年度で七年目となりました。その間に三百名近い生徒が高等部を卒業して社会に出ていきました。そのときは最善であると思っていたことも振り返ってみるとうまくいった生徒ばかりではないことは確かです。思い出してみると、そのときにもっと本人とコミュニケーションをとったり、周りの方（関係機関等）の意見を聞いたたりしておけばよかったと思うこともあります。また、在学中にもっと指導できたことはなかったかと考えることもあります。そのようなことから学んだことが、「コミュニケーションの大切さ」と「キャリア教育の視点」「周りの人たちへの感謝」です。

一つ目は「コミュニケーションの大切さ」についてです。進路指導の仕事は、校内の関係する先生方と連携することはもちろんですが、外部の方々と話をしたり、連携を密にしたりしないといけない問題が多々あります。そのとき、自分一人で解決するのではなく、どのように周りの方（関係機関等）の協力を得るとよい方向に進むかを考えるようになりました。自分一人ではできることに限界がありますが、周りの方と協力することで、一人で行うよりもよい結果が得られることが経験から分かりました。

二つ目は「キャリア教育の視点」です。進路担当者として外部の方と話をすると学校教育のヒントとなることを得ることができません。私は、外部の方との話の中で、「社会に出たときに必要なことは何ですか」と質問しています。それぞれ答えは違いますが、意見として多いのは、「挨拶、返事ができてほしい」「仕事に意欲をもつてほしい」という二点です。話を通して、仕事の技術や技能よりも社会人として当たり前なことをできることの

方が、社会からのニーズが強いことが分かりました。これらのことを生徒たちに伝える際に、「会社の人から言われたから」や「できた方がいいから」という理由だけで指導するのではなく、それがなぜ大切なのか、なぜ必要なかを教え、考えさせることや、学んだ（学んでいる）ことが将来にどのようなふうにつながっていくか、ということを意識させることが重要であると分かりました。そして、これこそが「キャリア教育の視点」でした。それまでは、キャリア教育というと、何か特別なことをするというイメージがありました。が、何気ない普段の指導が児童生徒たちの将来につながるということを教師も意識し、児童生徒たちにも将来につながるイメージをもたせるような指導をすることが大切だと分かりました。

三つ目は「周りの人たちへの感謝」です。前述したとおり、自分一人では、できることに限界があります。仕事だから手伝ってくれるのが当たり前というのではなく、一緒に仕事をしたからこそ、よりよい仕事ができたと考え、一緒に仕事をした同僚や関係機関の方々に感謝の気持ちをもつようにしました。また、気持ちをもつだけでなく、積極的に伝えることで、円滑に仕事が進められ、連携がより密になることが分かりました。今後も積極的に感謝の気持ちを伝えていきたいと思えます。

以上の三点が、私が進路指導の担当者として学んだことです。これらのことは、どの職場においても大切なことであると考えます。これらのことを胸にこれからの教員人生を歩んでいきたいと思えます。また、これらのことを気付かせてくださった関係する方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

県立那須特別支援学校

川俣 卓也

同僚性を高める

人間関係が良好で居心地のよい学級集団だと、一人一人に頑張る気持ち生まれ、集団で何かをすることが楽しくなり、学習への意欲も高まります。このように学級経営の充実を図ることが、子どもたち一人一人の成長に大きく関わっていると実感している人は多いのではないのでしょうか。

同様に、同僚性の高い職員集団は、教職員一人一人の意欲により影響を与えます。「あの先生と一緒に働けてうれしい」「私もあんな先生になりたい」という思いが仕事に向かう原動力となり、教職員としてのスキルアップにつながったという経験のある方も多いと思います。本冊子の内容にも、先輩教師との出会いが自分の成長につながったという経験が多く寄せられました。同僚性は、教職員の成長に大きく関わっています。

私たちは日常的に、同僚とコミュニケーションをとることで、意図せず多くのことを学んでいます。同僚との良好な関係を築き、共に学び合うことにより、高め合う職員集団に成長していきます。お互いに足りないところを補い合ったり、よい面を伸ばし合ったりすることで、教職員が働きたい学校、子どもたちが通いたい学校、さらには保護者や地域から信頼される学校にしていきたいものですね。

関係資料のご案内



「自分たちでできる研修ガイド」

栃木県総合教育センター
 栃木県幼児教育センター
 2016年3月



「学校におけるOJT 成功の鍵」

栃木県総合教育センター
 2020年3月

編集後記

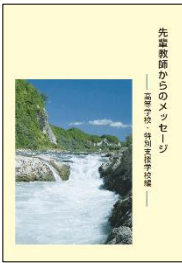
この度、多くの方々のご協力をいただき、本冊子「先輩教師からのメッセージⅢ―これからの教育を担うみなさんへ―」を発行する運びとなりました。御執筆くださいました教職員の皆様は、厚く御礼を申し上げます。

御提供いただいた玉稿には、執筆者御自身が意識を変化させながらミドルリーダーへと成長していった経験が盛り込まれておりました。これらの内容を受け、章末のコラムにおいて、各章の内容に関するトピックや指導のポイント等をまとめるとともに、参考資料を掲載しました。先輩教師からの熱いメッセージを学校教育に携わる方々や教育機関の方々、教職を目指す方々に広くお読みいただくことで、これからの教育を担う皆様の一助となれば幸いです。

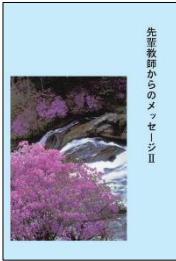
本冊子の内容につきましては、これまで作成しました「先輩教師からのメッセージ―小・中学校編―（平成十九年度）」「先輩教師からのメッセージ―高等学校・特別支援学校編―（平成二十年度）」「先輩教師からのメッセージⅡ（平成二十六年度）」とあわせて、栃木県総合教育センターのWebサイトよりダウンロード可能です。



「先輩教師からのメッセージ」
（小・中学校編）
平成 19（2007）年 11 月



「先輩教師からのメッセージ」
（高等学校・特別支援学校編）
平成 20（2008）年 11 月



「先輩教師からのメッセージⅡ」
平成 27（2015）年 3 月



先輩教師からのメッセージⅢ ―これからの教育を担うみなさんへ―

令和四（二〇二二）年三月

発行 栃木県総合教育センター

編集 栃木県総合教育センター研究調査部

〒三二〇―〇〇〇二 宇都宮市瓦谷町一〇七〇

電話 〇二八（六六五）七二〇四

FAX 〇二八（六六五）七三〇三

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

印刷所 株式会社 井上総合印刷